

岡山市埋蔵文化財発掘調査報告

# 鹿田遺跡

—ドコモ中国東古松ビル新築工事に伴う発掘調査—

2007年

岡山市教育委員会

# 序

私たちが生活を営むうえで、意識するにしろしないにしろ日々浸っている現代文化は、ときの流れの中で醸成されてきた時代時代の文化の蓄積を基に形成されています。とすれば現代文化を理解するには、各時代の文化に想いを寄せるることもまた必要なことと思います。

さて、私たちが住む岡山市域は「吉備」と表徴される政治的・文化的な地域性を示しております。その「吉備」の一画を占め、さらに吉備文化の栄えた中枢地域を占めていた岡山市域には、建造物・美術工芸品・彫刻等各種文化財をはじめとして、古墳などの遺跡も数多く見受けられます。その内容や密度は、全国的な水準に照らしても遜色無いものと思われます。

これら文化財とくに埋蔵文化財の保存並びに活用は、文化財行政の中心的な仕事となっておりますが、日々変貌を遂げている現代社会で生活している私たちにとって、市域の「開発」か埋蔵文化財の「保存」かと相反する悩ましい問題に常に突き当たっております。

岡山市教育委員会は、埋蔵文化財の保護保存と諸々の開発との調和を図るために、毎年のように各種遺跡の発掘調査を実施しておりますが、地域開発や生活環境の改善要請と文化財保存の社会的要求との狭間に立って、文化財の保護保存の理念にとって有効な行政的施策とは如何にあるべきかと苦慮しながらも、その保存に鋭意取り組んでいる次第であります。

このたび報告いたします遺跡は、藤原氏殿下渡領の一つ鹿田庄域内と想定される鹿田遺跡の一画に位置しています。ここでまとめました調査成果につきましては、ご検討・ご批判を頂き、少しでも岡山地方の古代ないし中世の研究に寄与できますならば幸いに存じます。

なお、発掘調査につきましては、資材、作業員、工程等で工事関係者の方々の全面的な協力のもと実施いたしました。また、暑い中作業に従事された担当者各位に対しましても、心から謝意を表する次第であります。

平成19（2007）年3月

岡山市教育委員会

教育長 山根文男

## 例　　言

1. 本書は、岡山市教育委員会・岡山市埋蔵文化財センターが、平成14（2002）年にドコモ中国東古松ビル新築工事に伴って実施した発掘調査の報告である。
2. 発掘調査の対象地は、岡山市東古松一丁目20番1、ドコモ中国東古松ビルに付随する地下油槽部分にあたる。
3. 報告書の作成は、岡山市教育委員会生涯学習部文化財課が実施し、編集と執筆は神谷正義が担当した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、調査員の柴田英樹と神谷がこれを行い、遺物の整理・実測は神谷が行った。そして遺構図の浄書は柴田が、遺物実測図の浄書は神谷がそれぞれその任にあたった。
5. 獣骨に関して、石丸恵利子（京都大学大学院生）氏のご教示を得た。
6. 本文中に用いている高度値は、標準海拔高度（東京湾の平均海水面、TP）、方位はすべて磁北である。
7. 本文中に用いている国土座標は、世界測地系による国土座標第V座標系表示である。
8. 本文中に使用した地図は、国土地理院発行「岡山市南部・東部」に加筆したものである。
9. 出土遺物の色調記載については、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修）に拠っている。
10. 遺物・実測図・写真等は、岡山市埋蔵文化財センター（岡山市網浜834-1）にて保管している。

## 目　　次

|                        |       |    |
|------------------------|-------|----|
| I　遺跡の位置と環境             | ..... | 1  |
| 1　鹿田遺跡の位置              | ..... | 1  |
| 2　周辺の遺跡と歴史的環境          | ..... | 1  |
| II　調査の経過               | ..... | 8  |
| 1　調査に至る経過              | ..... | 8  |
| 2　調査の経過                | ..... | 9  |
| 3　試掘確認調査               | ..... | 10 |
| III　調査の概要              | ..... | 11 |
| 1　調査区の概要               | ..... | 11 |
| 2　遺跡の概要                | ..... | 11 |
| IV　ま　と　め               | ..... | 27 |
| 1　旭西平野南半部における旧微地形の復元   | ..... | 27 |
| 2　旭西平野南半部における遺跡の動向（素描） | ..... | 31 |
| 図　版                    |       |    |
| 報告書抄録                  |       |    |

## 挿入図目次

|                         |    |                                 |    |
|-------------------------|----|---------------------------------|----|
| 図1a 鹿田遺跡の位置（日本図）        | 1  | 図12 土坑・Pit出土物（1/4）              | 17 |
| 図1b 鹿田遺跡の位置（岡山県図）       | 1  | 図13 井戸（1/30）                    | 18 |
| 図2 鹿田遺跡と周辺の遺跡           | 3  | 図14 井戸出土物（1/4、ただし35は1/2）        | 19 |
| 図3 試掘坑と調査区の位置図（1/2,500） | 9  | 図15 井戸（下層）出土物（1/4、ただし47～50は1/8） | 20 |
| 図4 試掘坑土層柱状図（1/30）       | 8  | 図16 造構に伴わない出土物（1/4）             | 21 |
| 図5 試掘坑A溝出土土器（1/4）       | 8  | 図17 鹿田遺跡の建物方位                   | 22 |
| 図6 検出遺構平面図（1/100）       | 12 | 図18 鹿田遺跡周辺の地形復元                 | 29 |
| 図7 基本層序と土層              | 13 | 図19 鹿田遺跡周辺の土層模式図（1/40）          | 30 |
| 図8 土坑1（1/30）            | 13 | 図20 津島江道遺跡出土縄文前期土器（1/4）         | 32 |
| 図9 土坑2（1/30）            | 14 | 図21 岡山県下における縄軸出土遺跡              | 34 |
| 図10 Pit 6（1/20）         | 15 | 図22 旭西平野南部の莊園分布                 | 35 |
| 図11 柱列（1/20）            | 16 |                                 |    |

## 表 目 次

|                  |    |                   |    |
|------------------|----|-------------------|----|
| 表1 鹿田遺跡と周辺の遺跡    | 4  | 表4 出土物観察表（39～50）  | 20 |
| 表2 出土物観察表（1～14）  | 17 | 表5 出土物観察表（51～65）  | 21 |
| 表3 出土物観察表（15～38） | 19 | 表6 岡山県下における縄軸出土遺跡 | 34 |

## 図版目次

|                                  |  |
|----------------------------------|--|
| 図版1 発掘調査区全景、調査区全景（西から）、調査風景      |  |
| 図版2 調査区全景（東から）、柱列（南から）、各Pit（南から） |  |
| 図版3 土坑1、土坑2、土坑2断面（北から）           |  |
| 図版4 Pit 6、柱列1断面、井戸               |  |
| 図版5 出土物（中世土器類）                   |  |
| 図版6 出土物（陶磁器類）                    |  |
| 図版7 出土物（木製品・獸骨）                  |  |

# I 遺跡の位置と環境

## 1 鹿田遺跡の位置

鹿田遺跡（調査地）は岡山市東古松一丁目20番1に所在する。現在は旭川右（西）岸域に形成された沖積平野（旭西平野）の南半に位置している（図1）。この地域は岡山市街地の南端にあたり、近年急速に市街地化が進んだ。そのため地形の微妙な起伏を窺うことは既にできない状況である。旭西平野<sup>(1)</sup>の北半部は、岡山県北の山間地から流下してくる旭川及びその旧河道により形成された自然堤防（微高地）と後背湿地の入り交じる地帯であるが、南半部は旭川河口付近に位置しており、旭川によって運ばれたシルトや砂が堆積し形成された三角州地帯である。したがって、鹿田遺跡周辺およびその南に広がる土地は、緩やかな傾斜面で構成された地勢であり、沖積化的進行につれ中世後半から近世にかけて開発されていった地域である。旭西平野形成史の中では比較的最近のことである。

鹿田遺跡は、この三角州の先端付近に立地・形成された遺跡である。遺跡が本格的に顕在化していく弥生時代中期後半の頃は、海岸線あるいは海浜の近くに形成された集落の一つであったと思われる。

## 2 周辺の遺跡と歴史的環境

### 1 古代以前

旭西平野周辺における人の活動は、東方2kmに所在する操山山塊からナイフ形石器や細石器といった遺物が採集<sup>(2)</sup>されることから、旧石器時代末にまで遡る。さらに周辺にまで視野を広げれば、犬島諸島や児島の米崎<sup>(3)</sup>などからも石器が採集されており、旭西平野周辺および児島湾を取り囲む尾根上に旧石器人が活動していたことは疑いない。ただ当時の海平面は現在よりも約20mほど低かった



図1a 鹿田遺跡の位置▲

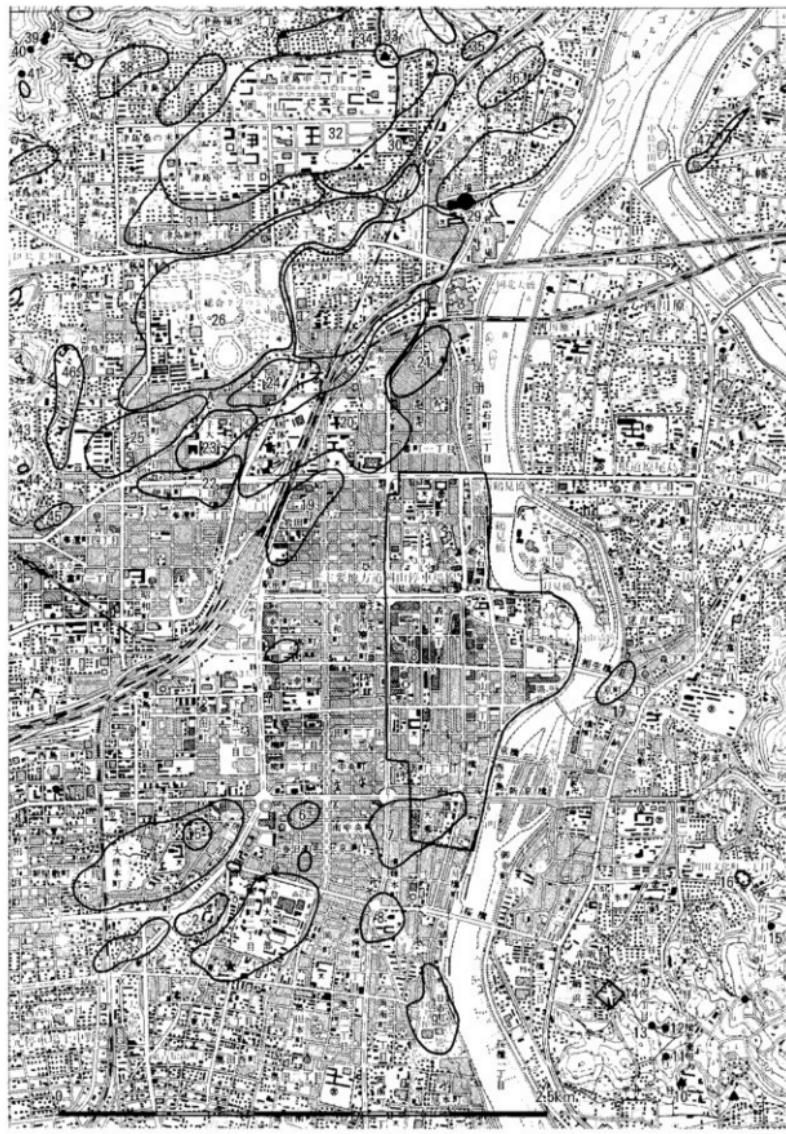
図1b 鹿田遺跡の位置▶



と想定されている。現在、山塊尾根上に採集される石器類は、旧石器人の生活の一部を反映しているに過ぎず、海面下に没している土地にも恐らく多くの生活の痕跡が迫れることであろう。その環境状況は、縄文時代草創期ないし早期段階でも基本的に同様であったと思われるが、7000～5500年前になると気候が温暖に推移し、海平面の上昇、いわゆる縄文海進がおこり環境の変化が生じたとされる。縄文時代早期～前期段階は、海進が頂点に達し、まさに生活環境が激変した時期であった。旭西平野は半田山山塊の南麓あたりまで海水が進入して、その汀線付近には朝寝鼻貝塚の形成をみている。朝寝鼻貝塚は縄文後期土器を中心としていたから、縄文後期の海岸線もまた漠然と半田山の裾部周辺と想定し、それを前提として山麓部に集落形成を想定していた。しかし、朝寝鼻貝塚の下層から羽島下層式土器群が出土<sup>(4)</sup>し、土器に磨耗が見られるものの石器なども一定量出土していることから、ごく近隣に縄文前期集落が存在していたと想定しうる状況になった。確かに、縄文前期土器は津島江道遺跡からも出土<sup>(5)</sup>しており、このころ既に沖積高地上に縄文前期人の足跡を辿ることができる。朝寝鼻・津島江道遺跡とも、縄文前期土器検出面は標高2.5mほどの位置である。そのころには、海進現象はピークを迎えていて沖積化が進行していた時期であり、ある程度乾燥化した沖積地上には、すでに生活痕跡を残す環境が形成されていたことを示している。そして岡大津島遺跡の発掘成果によると、縄文時代後晩期になるとこの沖積地上に、岡山大学津島遺跡群<sup>(6)</sup>・津島江道遺跡などが形成され、かなり安定した集落が形成されていたように思える。同様な傾向は旭川対岸域の操山山麓北側<sup>(7)</sup>にも窺うことができ、岡山平野をとりまく山麓部には、同様な居住環境を選んで縄文集落が形成されていた可能性がある。遺構の検出はなされていないが、鹿田遺跡の縄文中期土器<sup>(8)</sup>も、そのような環境変化の過程で、沖積地に進出した縄文人の活動痕跡の一微証であろう。

旭西平野において、弥生遺跡から弥生前期土器片がよく出土する。その中で、津島遺跡<sup>(9)</sup>・津島岡大遺跡<sup>(10)</sup>・津島江道遺跡<sup>(11)</sup>からは前期に遡る水田遺構が検出されている。これら前期水田の経営と生産量の実態はこれからの課題であろうが、概況として、水田農耕による生産力の拡大と人口の増加、そして労働編成の組織化・複雑化は、弥生集落の連絡を進展させると共に集中化していく、同時に集落ごとに役割・機能が特化していくとまとめることはできよう。そのような動向は、弥生時代中期に至り、津島遺跡・南方遺跡<sup>(12)</sup>等の旭西平野北半部の集落の発展を促し、木器製作<sup>(13)</sup>や石器製作<sup>(14)</sup>を分化させると同時に、南半部に海浜集落・漁獵・海上交通を生業としていたと評される天瀬遺跡・鹿田遺跡を形成させた原動力になったことであろう。天瀬・鹿田遺跡周辺における弥生中期の水田跡が未確認である現況においては、旭西平野北半部の遺跡群との交流なくして、両遺跡の存立は考えられないと言えよう。沖積地、特に旭西平野南半部への進出は、当遺跡から出土した弥生前期土器の出土からも、すでに前期段階から試行されていたようであるが、やはり安定した集落の形成は、弥生中期後半から後期段階になって可能となつたと想定したい。弥生後期には、天瀬遺跡の北側<sup>(15)</sup>と大供中道遺跡<sup>(16)</sup>で、全貌こそ把握されていないが、水田痕跡が確認されており、また鹿田遺跡においても弥生時代後期以降と考えられる水田跡が検出されている<sup>(17)</sup>。後期後半以降、天瀬・鹿田遺跡周辺では、ある程度複数の生業を営み、生活基盤の安定化を果たしていたのではないかと思われる。

一方弥生後期末以降、旭川右岸の半田山や京山山塊には、弥生墳丘墓である都月坂2号墓<sup>(18)</sup>や、前期古墳群である七つ塙古墳群<sup>(19)</sup>、そして津倉古墳<sup>(20)</sup>等、中小の古墳が、継続して造墓されている。これらは旭西平野に展開する集落を統括調整していた人物（首長）の墓であろう。これらの首長墓は、前方後円墳・前方後方墳をはじめとした古墳を築造し続けるが、大型前方後円墳は、前期中頃の神宮



寺山古墳（全長150m）<sup>19</sup>だけであり、隣接する旭東平野、足守川流域・総社平野の前方後円墳集造況と比べると見劣りがすることは否めない。さらに後期に至ると、矢坂山山塊に横穴式石室墳の群集が認められる<sup>20</sup>が、背後の津高盆地周辺、および旭東平野周辺の龍ノ口山塊、操山山塊<sup>21</sup>の群集規模には及ばない状況と言える。

古墳時代の集落は、津島岡大遺跡、津島江道遺跡、また鹿田遺跡において、弥生時代から引き続いて営まれていることは確実であるが、集落分布・変遷等の把握が十分なされているとはいえない。古墳動向と集落形成の関連性など、解明しなければならない課題は多い。

## 2 古代以降

旭西平野は条里地割りの保存もよく、復元が一定進んだ地域である。古代には御野郡に属し、『和名抄』に「国府在美能郡」とあるように、備前国における行政の中枢を形成していたと思われる。にもかかわらず、遺跡のうえから国府関連と確証できる遺構は今のところ検出されておらず、むしろ条里・地名・遺跡状況から、旭川を挟んで隣接する上道郡に所在していたとの想定<sup>22</sup>が有力である。旭西平野では、この時期の遺跡そのものの調査例も蓄積されているとは言えず、成果も単発的である。その中で古代の遺構が集中的に調査できているのは、津島岡大遺跡周辺であろう。条里関連と想定される大溝が検出<sup>23</sup>されているし、津島江道遺跡では溝に囲まれた区画が存在し、官衙的な建物の所在が想定<sup>24</sup>されている。旭川に接する北方長田遺跡<sup>25</sup>でも一定量の土器が出土している。ただし、旭西平野における古代の遺跡と条里ならびに遺跡相互の関係は、充分把握されているとは言えない。現在、鹿田遺跡およびその周辺の調査例から多大な成果が導き出されているように、旭西平野の古代も、今後遺跡の実態が明らかになるにつれて豊かな情報が提供されることであろう。

鹿田遺跡周辺の最近の調査例では、鹿田地区周辺の開発は、北半部と比べてもそれほど降る年代ではなく、9~10世紀に建物等が検出されていて、集落あるいは役所的施設がすでに所在していた。しかし、御野郡域に見られる牧石・御野・津島・伊福・広世・出石郷などは北半部に分布しており、鹿田周辺には郷の所在が知られていない。条里制施行時に掌握されていた集落の形成実態を反映してい

表1 鹿田遺跡と周辺の遺跡 [番号 遺跡名(種別/時代)]

### ★ 当調査区

|                                   |                                   |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 鹿田遺跡 (集落/弥生~江戸)                 | 25 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡<br>(集落/弥生~平安・室町) |
| 2 鹿田遺跡/鹿田本町遺跡 (集落/平安~鎌倉)          | 26 津島遺跡 (集落/弥生~江戸)                |
| 3 鹿田本町遺跡 (散布地/鎌倉~室町?)             | 27 北方遺跡群 (集落/弥生~江戸)               |
| 4 大供本町遺跡 (集落/古代~江戸)               | 28 北方長田遺跡 (集落/弥生~江戸)              |
| 5 大供東浦遺跡 (散布地/弥生~室町?)             | 29 神宮寺山古墳 (前方後円墳/古墳)              |
| 6 大供中道遺跡 (散布地/弥生~古墳・鎌倉~室町)        | 30 津島江道遺跡 (集落/縄文~江戸)              |
| 7 天瀬遺跡 (集落/弥生~江戸)                 | 31 津島新野遺跡 (集落/弥生)                 |
| 8 新道遺跡 (集落・城下町・散布地/奈良~江戸)         | 32 津島岡大遺跡 (集落/縄文~江戸)              |
| 9 二日市遺跡 (鉢座・散布地/弥生~江戸)            | 33 朝雲農貝塚 (貝塚・散布地/縄文)              |
| 10 操山20号墳 (貝塚/平安~室町)              | 34 津島東遺跡 (散布地/縄文~室町)              |
| 11 操山10号墳 (前方後円墳/古墳)              | 35 鶴田遺跡 (集落/弥生ほか)                 |
| 12 瓢浜茶臼山古墳 (前方後円墳/古墳)             | 36 三野宮之段遺跡 (散布地/鎌倉~室町)            |
| 13 操山10号墳 (円墳/古墳)                 | 37 お環塙古墳 (前方後円墳/古墳)               |
| 14 瓢浜庵寺 (寺/飛鳥~平安)                 | 38 津島福原遺跡 (集落/古墳・室町)              |
| 15 操山106号墳 (前方後円墳/古墳)             | 39 都月坂1号墳 (前方後方墳/古墳)              |
| 16 操山217号遺跡 (散布地/旧石器)             | 40 都月坂2号墓 (墳墓/弥生)                 |
| 17 相生横東詰遺跡 (仮称) (散布地/弥生)          | 41 都月坂3号墳 (前方後円墳/古墳)              |
| 18 岡山城跡 (城/室町~江戸)                 | 42 都月坂4号墳 (円墳/古墳)                 |
| 19 岩田町遺跡 (仮称) (集落/弥生)             | 43 鎌倉古墳 (前方後方墳/古墳)                |
| 20 南方遺跡 (釜田・蓬田)群<br>(集落・水田/弥生~江戸) | 44 始林寺遺跡 (散布地/弥生)                 |
| 21 広瀬遺跡 (散布地/弥生)                  | 45 津倉遺跡 (散布地/弥生?)                 |
| 22 上伊福 (立花) 遺跡 (集落/弥生~室町)         | 46 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡<br>(集落/弥生~平安)   |
| 23 上伊福遺跡 (集落/弥生~古墳)               | 47 中島城跡 (館・集落/鎌倉~江戸)              |
| 24 諏訪遺跡 (集落/弥生~平安)                |                                   |

るのであろうし、その意味では鹿田地域は新規開発域であったと想定できる。鹿田地区にも観察される方形地割りが、北半部の正方位と異なり、15度ほど軸が東へ振っているのは、北半部とは別の契機による新規開発域だからということもあるうし、より自然地形に影響されているからと見なして、国の主導ではなく在地勢力による開発であったからと考えることも可能であろう。

この御野郡南部には、鹿田庄を筆頭に大安寺荘・円覚寺荘・元興寺荘・御野新莊・野田莊・西野田保・新堤保・市久保が設定されている。そのなかでも、鹿田庄は、817（弘仁8）年にはすでに藤原氏の殿下渡領になっている<sup>(20)</sup>し、大安寺荘は747（天平19）年に『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に「長江葦原」50町と現出する。円覚寺荘も883（元慶7）年に常荒田49町103歩と記録に見え、8～9世紀代には旭西平野の南域は開発が進んでいたようだ。

これら荘園は平安時代には荘域をさらに広げその経営を拡大させていったと思われるが、その中心域は、奈良時代から平安時代初頭の井戸、溝、土坑などの多くの遺構と多数の遺物を検出する鹿田遺跡周辺であり、平安時代末期の井戸から「・・・御庄久延弁」木簡を出土した新道遺跡<sup>(21)</sup>周辺をも含んだ地域であろう。この地域が初期鹿田庄の範囲であった。初期鹿田庄の立地の特徴は、平野北半からの陸上交通と旭川あるいはその分流による水上交通との結節点であることと思われ、その立地故に重要視され繁栄していたと想定<sup>(22)</sup>される。

中世の御野郡の実態はよくわからない。伊福郷に地頭職として相模国松田氏が関東武士として入部したことや『大乘院寺社雜事記』の1481（文明13）年の記事により鹿田庄はいまだ藤原氏の殿下渡領とされるが、年貢は松田氏の請所となっており、このころには実質的に松田氏の支配下にあったことが窺える。さらに『宣胤卿記』1497（明応6）年の記事で藤原氏の殿下渡領としての鹿田庄の記述がみられるが、これ以降は史料を欠き、名実ともに松田氏の支配下に入ったと思われる。室町時代以降、備前国守護である赤松氏の麾下で、金川城を拠点に勢力拡大をはかっていた松田氏が、御野郡にも勢力をのばし、その支配下に置いていたと推測されるのである。群雄並び立つ戦国時代になると、各地の勢力争いにこの旭西平野も巻き込まれていき、ムラムラは損亡衰退や移動などを経験したことであろう。そして、御野郡を掌握していた松田氏も、1568（永禄11）年、に宇喜多直家に滅ぼされ、御野郡は宇喜多直家の支配するところとなった。1573（天正元）年、宇喜多直家は、石山の城（前岡山城）にはいり、新たに城を築くとともに、城下町の建設にのりだしたのである。

中世遺跡の調査は、鹿田遺跡、新道遺跡、大供本町遺跡<sup>(23)</sup>や岡山城二の丸跡<sup>(24)</sup>などで城下町形成に先行する中世遺構が判明ってきており、成果の蓄積が進みつつある。また、旭西平野南半部の田中<sup>(25)</sup>、辰巳、富田でも輸入陶磁器類の遺物が出土している。前述の荘域内での遺跡が確認されつつあり、その荘域内の集落の実体把握に期待が持てる状況である。その具体像の復元はやはり鹿田遺跡が卓越しており、鎌倉時代から室町時代の井戸、溝、土坑などの多くの遺構遺物が検出され大規模な集落の存在が想定されている。石造物や神社などの調査成果を取り入れて、今後中世村落の実態や相互の関係など、より詳細な歴史像が提示されることであろう。

宇喜多直家により着手された岡山城下町の形成および整備は、宇喜多秀家・小早川秀秋、そして池田氏を経て実施されており、現在の岡山市街地の景観を形成している。さらに、古代中世から連綿と受け継がれてきた農地の拡大への熱意は、近世にいたると干拓による大規模な新田開発へと結実していき、当遺跡の立地する周辺も海浜部から内陸部へと徐々に変貌していき、耕地の広がる農村景観を生成することとなった。そして、岡山大学医学部や岡山市庁舎などが建設されてくるにつれ、周辺の

市街地化が進み、住宅密集地域となって現在に至っている。

### 註

- (1) 現旭川西岸及び現笛ヶ瀬川東岸に形成された沖積平野を指すこととする。
- (2) 鎌木義昌1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』岡山市役所
- (3) 白石純・小野伸・小野勢1997『岡山市犬島採集の旧石器』『古代吉備』第19集  
白石純・小野伸・坂田崇1998『岡山市米崎採集の旧石器』『自然科学研究研究所研究報告』第24号 岡山理科大学
- (4) 富岡直人ほか1998『岡山市津島東3丁目朝寝鼻貝塚発掘調査概報（加計学園埋蔵文化財発掘調査報告書2）』
- (5) 神谷正義・草原孝典1998『岡北中学校内遺跡の発掘調査』『岡北中学校五十年の歩み』岡北中学校創立50周年記念事業実行委員会
- (6) 山本悦世2004『津島岡大遺跡の研究1.纏文時代後期の集落構造とその推移』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (7) 岡山県教育委員会1993『百間川津田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 における百間川津田遺跡四元調査区などを参照
- (8) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1988『鹿田遺跡I』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊）
- (9) 高畠知功2003『弥生時代前期水田』『津島遺跡4－岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査－』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173 岡山県教育委員会  
岡本泰典2004『弥生時代前期の水田について』『津島遺跡5－岡山県総合グランド第二次・第三次確認調査－』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181 岡山県教育委員会 など津島遺跡1～6を参照
- (10) 岩崎志保・山本悦世2003『耕作地の問題』『津島岡大遺跡11～10・12次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター など津島岡大遺跡の報告を参照
- (11) 神谷正義1988『津島江道遺跡』『日本における稻作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡考古学会
- (12) 出宮徳尚1986「39 南方遺跡」『岡山県史第18巻（考古資料）』岡山県 など
- (13) 扇崎由・安川満1996・1997『上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）』『岡山市埋蔵文化財調査の概要1994・1995年度』岡山市教育委員会  
扇崎由2005『南方（済生会）遺跡－木器編－』岡山市教育委員会
- (14) 岡山市教育委員会1993『南方（国体開発）遺跡現地説明会資料』 石器の製作途上品や石屑が多数出土することから石器製作をしていたことが明らかになっている。
- (15) 安川満2001『天瀬（共同溝）遺跡の立会調査』『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999年度』岡山市教育委員会
- (16) 河田健司2002『大供中道遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- (17) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2000・2000『岡山大学医学部附属病院病棟 9・11次調査』『岡山大学構内遺跡調査研究年報16・17』及び2004『鹿田遺跡の調査研究』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』 を参照
- (18) 近藤義郎1986「53 都月坂2号弥生墳丘墓」『岡山県史第18巻（考古資料）』岡山県

- (19) 近藤義郎他1987『七つ塙古墳群』七つ塙古墳群発掘調査団
- (20) 安川満2000「片山古墳と津倉古墳」『吉備の古墳上(備前・美作)』吉備考古学ライブラリイ・4吉備人出版
- (21) 錄木義昌1962「神宮寺山古墳」『岡山市史(古代編)』岡山市役所
- (22) 石井中学校古墳クラブ郷土古墳調査班編1980『矢坂山古墳群—分布調査のあらましー』岡山市立石井中学校古墳クラブ
- (23) 出宮徳尚1986「110 操山古墳群」『岡山県史第18巻(考古資料)』
- (24) 木下良1986「古辞書類に見る国府所在郡について」『国立歴史民俗博物館研究報告第10集(共同研究「古代の国府の研究」)』 国立歴史民俗博物館
- (25) 岩崎志保2005「条里の溝について」『津島岡大遺跡16-第17・22次調査-』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (26) 高畠知功1988「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告18』 岡山県教育委員会
- (27) 宇垣匡雅・河田健司2001「北方長田(水質試験所)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999年度』岡山市教育委員会
- (28) 鈴木景二2002「附章4 備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会 鹿田庄に関する文書類の引用ここに拠る
- (29) 草原孝典編2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (30) 註(29)前掲  
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2005「鹿田遺跡と「鹿田庄」」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報No34』
- (31) 岡山市教育委員会2006『大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料』
- (32) 岡山市教育委員会1998「岡山城二ノ丸(中電変電所)跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1996(平成8)年度』  
松本和男、乗岡実、氏平昭則1998『岡山城二の丸跡—中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告—』中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会
- (33) 田中地区的区画整理事業に伴って、岡山市教育委員会が一部立会調査しているが、中世遺物を含む包含層を検出した。辰巳地区でも同様である。中世遺物には、日常の土器類と共に若干ながら輸入陶磁器も認められた。犬飼秀哉『岡山市田中の歴史発掘』(私家版)に調査担当者からの書き書きが掲載されている。

## II 調査の経過

### 1 調査に至る経過

2001（平成13）年12月、西日本電信電話株式会社岡山支店長から、NTTサービスセンター敷地内（岡山市東古松1-12-25）における埋蔵文化財等の状況について問い合わせがあった。現事務舎を、曳き家において移設し引き続き利用するものの、新たに基礎を設置する必要のある事業を計画していることとのことであった。当該地周辺は、岡山大学医学部構内を中心とする鹿田遺跡に近接していることもあり、事前に埋蔵文化財等の存否を確認する必要がある旨を述べ、具体的な協議にはいった。一連の協議<sub>(1)</sub>を経て、2002（平成14）年1月11日、敷地内の一角で試掘確認調査（試掘坑V）を実施した。試掘坑壁面の観察から、土器包蔵土を確認し、さらに井戸あるいは深い土坑と思われる掘り込みも検出し、遺跡地であることを確認した。その結果を通知<sub>(2)</sub>するとともに、遺跡の保護・保存に努めていただくようお願いした。同時に、岡山県教育委員会教育長宛に試掘確認調査の結果を報告<sub>(3)</sub>した。この事務舎曳き家工事に関しては、試掘の結果を受けて、基礎及び地中梁の深度が遺跡確認土層に到達しないよう設計の変更が行われた。また、基礎及び地中梁の掘方を掘削する時に立会し、包蔵土層への影響の有無を確認し必要に応じて記録することとした。そして、工事立会を実施し、遺跡の保存が図られていると判断した。

一方、この試掘確認調査の協議のなかで、同一敷地内におけるドコモ中国東古松ビル新築工事事業の計画を知るところとなり、かつ相談を受けた。当該地が遺跡地と判明したこともあり、再度試掘確認調査の実施をお願いするとともに、協議<sub>(4)</sub>を行った。そして、敷地内における遺跡地の広がりを把握するため、複数の試掘坑の設定を要望した。

2002（平成14）年1月31日、試掘坑4ヶ所を設定（第3図）し、試掘確認調査が実施された。その結果、試掘坑Aでは、中世の溝を検出し遺構の存在を確認した。また、場所により濃淡はあるものの、ほぼ全ての試掘坑で包蔵土層が認められた。しかしながら、試掘坑C・Dの土層堆積は、微高地の形成は脆弱であり、どちらかというと微高地端部の様相を示していると判断した。

試掘結果を受けて、NTTドコモ株式会社と遺跡の保護及び保存について協議<sub>(5)</sub>を重ねた。協議の内容は、期日的な制約から全面的な発掘調査は困難であるとするNTTドコモ側の意向もあって、微高地端部側に主要建物の配置が可能かどうか、杭の本数の減少、そして基礎及び地中梁の深度などについて種々の案が検討されてきた。結果として、建築面積（15,500m<sup>2</sup>）の大部分においては、造成土の厚みを増し保護層を確保し、基礎及び地中梁の深度が遺跡所在層に到達しない設計案に落ち着くこととなつたため、次善の策ながら遺跡の保護が一定程度図られると判断した。そして、地下油槽部分（97.3m<sup>2</sup>）に関しては、掘削が面的に無視できない面積を占めることもあり発掘調査を実施し、杭及び掘方については掘削時に立会を行うこととし、そのように実施した。

ドコモ中国東古松ビルに係る発掘ないし発掘調査については、法第57条の2・法第58条に定める届出及び報告が提出<sub>(6)</sub>された。発掘調査は、2002（平成14）年7月8日～同年7月19日までの10日間を費やして実施され、実施発掘面積は97.3m<sup>2</sup>であった。なお、調査に掛かる費用は、施主であるNTTドコモ株式会社が負担した。すなわち器財・作業員・現場事務所等の現物提供を受け、岡山市教育委

員会は調査員2人を派遣し、調査を実行していった。

## 2 調査の経過

発掘調査は緊急的措置として、岡山市埋蔵文化財センター職員のうち、秋からの調査にむけ準備中であった神谷正義と柴田英樹があたり、主として柴田が調査の実務を遂行した。

調査は、敷地北側に残存していた旧建物(NTT曉察)の解体及び基礎の撤去、そして整地作業が完了してから始められた。

2002(平成14)年7月8日、器財の搬入とともに、まずバックホーで整地層・水田土層を除去し、水田鋪床層から手掘りで掘り進め遺構の検出作業を行っていった。水田鋪床層から中世土師質土器等が散見されだし、包蔵土層からは黒色土器・須恵器片の混在も認められるようになっていた。そして包蔵土層の除去に従い柱穴等の遺構が検出されだしてきた。しかし発掘区域内は予想以上に旧建物の地中梁及び基礎杭が密集しており、遺構検出可能な面積は調査区の半分にも満たない状況であった。そのため事前に発掘グリッドを設定することはせず、発掘区の長軸方向に任意の基準杭2点を設置して、測量・実測の基準杭とした。調査終了前に、この基準杭の国土座標を求めた。

調査有効面積は僅かにも関わらず、最終的に、遺構として柱穴10、土坑2、井戸1基が検出された。7月19日、発掘調査は終了し、器財の撤去を行った。

調査にあたり、NTTファシリティーズ、(株)鹿島、(株)佐藤組、(有)グリーンアートからは現場作業員さんの手配や器財、及び測量などでお世話になりました。また、この年はいつもより暑い夏でしたが、その暑い中、慣れない作業に就いていただいた現場作業員(橋本 令、八幡 保、岩谷 リョウスケ)の皆さんにも、大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

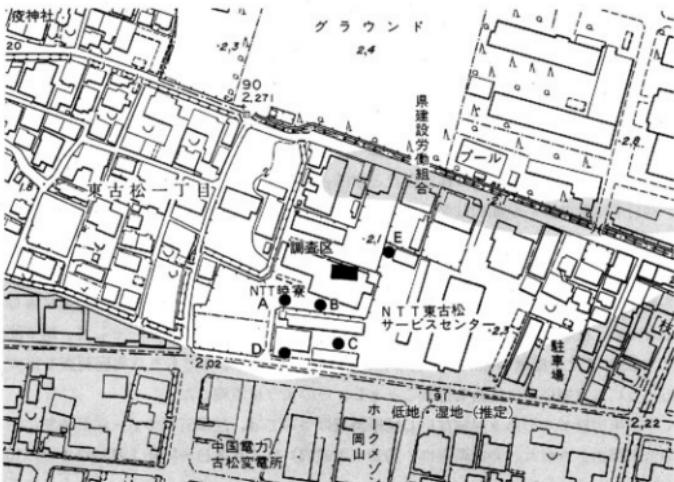


図3 試掘坑と調査区の位置図 (1/2,500)

### 3 試掘確認調査

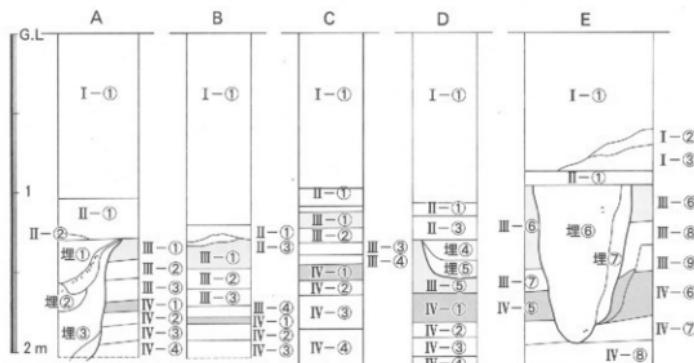
#### 1. 試掘坑実施位置（第3図）

2002(平成14)年1月11日及び同1月31日に実施された試掘坑は、計5ヶ所（第3図）。NTT営業室及び事務棟がまだ完全に撤去されていない段階ではあったが、敷地内における埋蔵文化財の有無及びその状況の把握ができるよう試掘坑位置の設定を心掛けた。

#### 2. 試掘確認調査の成果（第4図）

各試掘坑の土層堆積状況は図示のとおりである。当該地の土層堆積は、その形成要因で大別すると、I～IVの土層が認められる。すなわち、Iは現在造成土、IIは造成直前或いは中世・近世の水田耕作土ないし畑耕作土、IIIは中世以前の基盤土層（包蔵土層を含む）、IVは微高地形成土層、自然堆積土層（湿润地堆積土）。遺構はIIIの上面から検出される。ただしIII層そのものも分層され、それぞれが遺構面を形成しているようだ。

この大別を基準層として各試掘坑の上層を比較すると、各試掘坑は基本的に同様の土層堆積を示し



試掘坑土層注記

|       |           |       |            |     |           |
|-------|-----------|-------|------------|-----|-----------|
| I ①   | 舗装・造成土    | III ⑦ | 青灰褐色粘質微砂   | 埋 ① | 灰褐色粘質砂    |
| I ②   | 黄褐色粘質微砂   | III ⑧ | 青灰黄色粘質微砂   | 埋 ② | 青灰褐色粘質微砂  |
| I ③   | 褐黃灰色粘質微砂  | III ⑨ | 灰茶褐色粘質微砂   | 埋 ③ | 青灰褐色シルト微砂 |
| II ①  | 旧耕作土      | IV ①  | 黒色シルト微砂    | 埋 ④ | 灰褐色粘質微砂   |
| II ②  | 灰色細砂      | IV ②  | 黒褐色シルト粘土   | 埋 ⑤ | 茶褐色微砂シルト  |
| II ③  | 青灰褐色粘質微砂  | IV ③  | 灰黑色シルト粘土微砂 | 埋 ⑥ | 青灰褐色微砂細砂  |
| III ① | 灰褐色粘質微砂   | IV ④  | 暗灰色シルト微砂   | 埋 ⑦ | 青灰黄色粘質細砂  |
| III ② | 灰茶褐色粘質微砂  | IV ⑤  | 暗灰褐色細砂     |     |           |
| III ③ | 青灰褐色シルト微砂 | IV ⑥  | 暗茶灰色微砂シルト  |     |           |
| III ④ | 暗灰色シルト微砂  | IV ⑦  | 暗黄色シルト     |     |           |
| III ⑤ | 褐黄色粘質微砂   | IV ⑧  | 淡青灰色シルト粘土  |     |           |
| III ⑥ | 黄灰褐色粘質微砂  |       |            |     |           |

図4 試掘坑土層柱状図 (1/30)

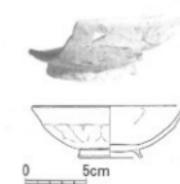


図5 試掘坑A溝出土土器(1/4)

てはいるが、2ヶ所の試掘坑（A・E）で明瞭な埋蔵文化財包蔵土層が確認された。いずれも敷地内の北半側に位置し、溝ないし井戸と思われる落ち込みの一部が検出されている。両者とも埋土中に中世土師質土器の細片が混在しているが、試掘坑Aの溝からは土器榎（第5図）が出土している。南半部についても、IV層（微高地形成土層）は存在するが、粘質が強くどちらかといえば温潤気味の土地柄であったことを示唆している。北半部のような明瞭な遺構、遺物は検出されず、微高地縁辺部の地勢状況であったと想定される。

今回の試掘で、岡山大学医学部構内に所在する微高地の広がりが当該地まで延びていることが明らかとなり、遺構の存在も確認され明瞭な遺跡地であると判明した。しかし、南半は温潤化傾向が強く、居住環境には適さない状況であろうことも判明した。

#### 註

- (1) 「埋蔵文化財等の存在状況調査について（依頼）」（平成13年12月27日付）が提出されたので、「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について」（平成13年12月28日付け、岡市教委文第427号）で試掘確認調査の必要がある旨を回答した。
- (2) 「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について」（平成14年1月21日付け、岡市教委文第458号）で内容を通知。
- (3) 「埋蔵文化財確認調査の報告について」（平成14年1月21日付け、岡市教委文第459号）
- (4) 「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について（依頼）」（平成14年1月25日付け）が株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国代表取締役社長から提出され、「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について」（平成14年1月28日付け、岡市教委文第467号）で試掘確認調査が必要な旨回答した。
- (5) 試掘結果については「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について」（平成14年2月6日付け、岡市教委文第491号）で通知し、遺跡の保存に努めるよう回答した。同時に、「埋蔵文化財確認調査の報告について」（平成14年2月6日付け、岡市教委文第492号）で岡山県教育委員会教育長宛にも試掘結果を報告した。
- (6) 「埋蔵文化財発掘の届出について（法第57条の2）」（平成14年5月7日付け、岡市教委文第107号）・「埋蔵文化財発掘の報告（法第58条）」（平成14年7月22日付け、岡市教委文第249号）

### III 調査の概要

#### 1 調査区の概要

発掘調査区は、ドコモ中国東古松ビルに付設する地下油槽部分にあたり、国土座標第V系のX = -149.867、Y = -38.025軸の交差点を内含する位置にある。調査区は、計画では面積97.3m<sup>2</sup>程であったが、直前まで鉄筋建物のNTT喫茶が建っていた場所であったため、基礎杭及び地中梁の掘削が縦横に及んでおり、そのため長辺13.5m、短辺6.4m、面積約86.4m<sup>2</sup>程の矩形範囲が調査対象域となるだけであった。さらに杭や梁等の影響などから、実質調査面積はその半分にも充たず、しかも調査可能な旧土層の残存は、狭いだけでなく虫食い状態(図6)を呈しており、けっして恵まれている条件ではなかった。

#### 2 遺跡の概要

##### 1. 基本層序と概況(図7)

調査区の基本層序は、図7に示されているように、井戸断面が観察できる北壁面の層序を代表させることができる。

試掘坑の土層(A~E)と対比させて紹介すると、I = 1層(造成土・基礎・埋土)、II = 2層(旧耕作土)、III = 3層(淡緑灰色粘質微砂、包藏土層)、IV = 5層(淡灰褐色粘質微砂、基盤土層)、6層(明黄橙色粘質土)以下とまとめることができる。3層の淡緑灰色粘質微砂は、古代～中世土器片が混入しており、中世以降に削平ないし再堆積を経て形成された土層である。遺構の検出はこの土

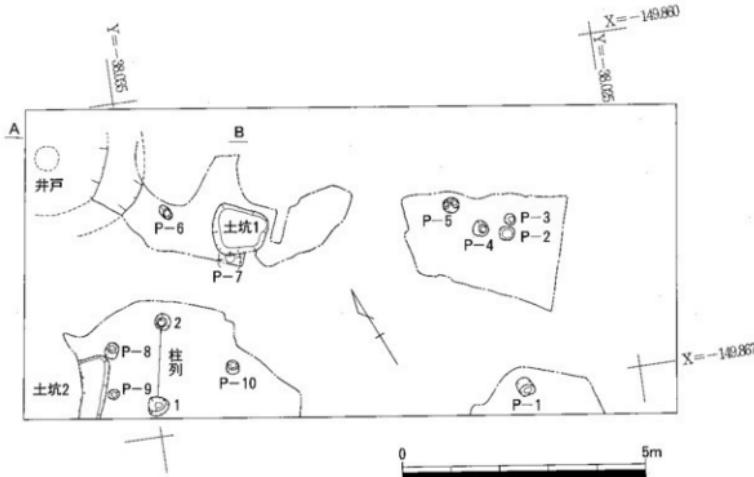


図6 検出遺構平面図(1/100)

層の除去作業中から現れる。この3層は中世基盤層であるが、その上部では2層の釘床ないし踏込層が分離できていないようだ。一部II層対応層も内包される土層である。このことは、この場所での水田化が基本的に微高地基盤を削平して開田されてきたこと、そしてかつては安定した居住域であったであろうことを示唆している。

IV層対応における分層可能な土層は、7・8・9・10・11層まで確認されている。そのうち7・9層は、黒色味の強い特徴ある層。また、10層は海拔0mに達し、11層は砂質土で崩落しやすい。

## 2. 遺構と遺物

柱穴、Pit群、土坑、井戸等が検出された。調査面積が狭く、既存の基礎等で面的な調査が困難なこともあります、遺構相互のまとまりが把握できず、それぞれの性格等は判然としない。なお、図示している断面黒塗りの出土物は、須恵器を表示している。

### 土坑1（図8、図12 1～6）

調査区中央西より検出された、約1m四方のやや歪な方形土坑である。検出面からの深さは10cmほど。埋土は2層に分層でき、2層共に遺物の混入が認められた。上層には炭粒を含む土も堆積していたが、火を焚いた跡とか作業の痕跡を示すような状況は認められなかった。

1・2層からは、須恵器蓋(1)・須恵質の皿(2)など8・9世紀代の遺物が、また白磁碗あるいは皿(3)・土師質土器碗(4・6)など12～14世紀代の遺物が出土するなど、年代に幅が認められる。さらに丹塗り土器器及び須恵器腹の破片など数にして三十数点が出土しているが、いずれも図化困難な細片である。内訳を紹介しておくと、須恵器片5点、丹塗土器片3点、土師質土器片25点である。これら遺物は層単位での採集がされておらず、土坑に伴う遺物の厳密な抽出をすることが出来ない。出土物の年代観に、古代から中世と幅が認められるのは、2次堆積としての混在を反映しているからであろう。したがって、土坑1の帰属年代は、もっとも出土量（破片としてではあるが）が多いことと、新しい年代に帰属する土師質土器碗<sub>(1)</sub>から、13世紀末～14世紀前半<sub>(2)</sub>を廻ることはないであろう。

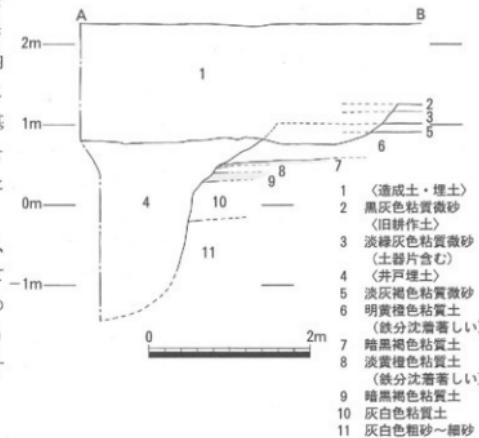


図7 基本層序と土層 (1/60)

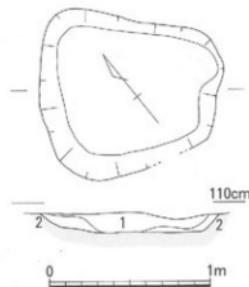


図8 土坑1 (1/30)

## 土坑 2 (図9)

調査区の南西隅で検出された長形の土坑。調査区外に続き、また基礎杭及び地中梁により大半が損壊されているため、全体の形状、規模は不明。土坑1と同様な歪ないし長形土坑の一部であろう。検出面からの深さは10cmほど。底の断面は、ゆるやかなU形をしており、埋土の分層は困難であった。

この埋土から土器片等が24点出土している。その内訳は、須恵器片(2点)、内黒土器(4点)、土師器片(18点)などである。いずれも細片で図化は困難であったが、内黒土器には婉らぎの破片が、そして土師器には円盤高台とおぼしき破片が認められる。また内黒土器片の内面に黒色の油膜か漆膜状の物質が付着している破片も認められた。

土坑2の帰属年代としては、判断基準となる個体に乏しいが、中世土器質土器が見られないことと内黒土器の存在から、10世紀後半～11世紀前半ごろと推定できようか。

## Pit群 (図6)

組合せが明瞭でない柱穴及びPitをまとめて記述する。配置に関しては図6を参照。また各Pitの検出面と深さのレベルは測っているが、断面図は作成しておらず、記述だけにとどめる。ご寛恕願いたい。なお、土器が検出されその実測図を掲載している場合は、Pit番号の後に図面及び土器番号を表記している。

### Pit 1 (図6、図12 7)

調査区東南部で検出された長径40cm、短径30cmの楕円形Pit。検出面からの深さは13cm余。埋土は暗灰褐色粘質微砂で炭が混在していた。また埋土中から、須恵器杯底部(7)、土師器長脣甌の口縁部が出土している。土師器甌口縁部は、外面に荒いハケ目を残すが、内面はナデで平滑化されており、口脣部は横ナデによる摘みあげの形状的特徴が認められる。これら出土物からPit 1の帰属年代は、古代後半(9～10世紀)の範疇に収まるものであろうか。

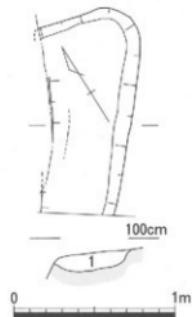
### Pit 2 (図6)

調査区の東半で検出された一辺30cmほどの隅丸方形状Pit。検出面からの深さは約15cm。暗灰褐色粘質微砂で埋まり、土器片等は出土していない。

### Pit 3 (図6、図12 8)

調査区の東半で検出された径20cmのPit。検出面からの深さは約12cm。埋土は暗灰色粘質微砂で炭粒が混在していた。埋土から土器片等が9点出土している。

出土物は小皿(8)の出土が見られる。その他にも、器形が判明しないほどの細片4点と内黒土器(?)1点、土師質土器小皿2点そして土端口縁片1点である。いずれも図化困難。小皿や土端の特徴は、



1 暗緑灰色粘質砂(土器片含む)

図9 土坑2 (1/30)

13世紀後半の年代。小皿(8)は比較的大きな破片であるので、Pit 3 の帰属年代も13世紀後半頃として差し支えないであろう。

#### Pit 4 (図6、図12 9・10)

調査区の東半で検出された径35cmのPit。検出面からの深さは約25cm。埋土はPit 3と同様に暗灰色粘質微砂で炭を含む。埋土から土器片等が15点出土している。その内訳は、土師質土器碗8点、小皿1点、皿1点、土壙片4点及び移動式壙片1点。また土壙片には煤の付着が顕著である。いずれの破片も細片であったが、2点を図示。土師質土器碗や土鍋の特徴は13世紀後半の年代。

#### Pit 5 (図6)

調査区の東半で検出された径30cmほどのPit。検出面からの深さは約23cm。ただし最深部は二股状に分かれている。埋土は暗灰褐色粘質微砂で炭を含み、土器片等が7点出土しているが、いずれも細片。須恵器片がみられるが、土師質土器碗の特徴から13世紀代（後半）の帰属と想定できる。

#### Pit 6 (図10、図12 11・12)

調査区西半、井戸と土坑1の中間あたりで検出された。長径32cm、短径21cmあまりの楕円形を呈し、検出面からの深さは38cmほどを測る。形状から柱穴跡と想定している。埋土は、暗灰色粘質微砂。埋土から土器片等が11点出土している。殆どが細片であるが、内黒土器杯(11)・土師質土器小皿・土壙片(12)が出土している。特に土壙片は柱根の周りに詰め込まれたか、添えられていたと判断できる状況で検出され、ほぼ半個体分出土し器形の復元が可能であった。また、他の土器とは出土の状況が異なっており、遺構の帰属年代の有力な根拠となろう。土壙は、口径が36cmほどで体部形態はCタイプ、鹿田遺跡編年のIII-2期（13世紀後半～末）の特徴を示している<sup>(1)</sup>。内黒土器杯は、碗かもしれないが、白っぽい胎土で内面は黒色、雜であるがヘラミガキが施されている。

Pit 6 が柱穴であっても、どの柱穴と組み合わされて建物となるのかは、当調査区の遺存状況では困難であった。

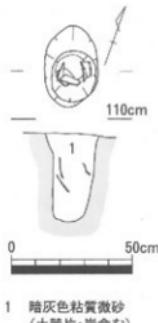


図10 Pit 6 (1/20)

#### Pit 7 (図6、図12 13・14)

土坑1に接続したPitである。一部基礎梁部分で損壊しており、また土坑1によって切られているため、全体の半分ほどの掘り上げに留まっている。検出面からの深さは約29cm。埋土はPit 6と同様、暗灰色粘質微砂である。土器片等15点が出土しているが、11点は図化困難であった。形状の判明するものには、土師質土器小皿2点、土師質土器碗高台部2点が出土している。碗高台部(14)の特徴から13世紀末～14世紀初頭の年代が与えられる。また、小皿(13)は、小皿2点とするものが同一個体で、もしかするとごく低平な高台が付着する碗の可能性もある。そうすれば14世紀前半の年代が想定される。土坑1との年代観は、遺物は土坑1→Pit 7であるが、切り合い関係は、Pit 7→土坑1と認識しており矛盾する。いずれの土器も細片であり微妙な差であるとともに、取り上げ時の誤錯があったの

かもしれない。どちらにせよ、検出されている遺構の評価には影響がない。

#### Pit 8 (図6)

土坑2に近接したPitである。長径35cm、短径25cm。検出面からの深さは17cm。埋土は暗灰褐色粘質微砂で、炭を含む。土器等は検出されていない。

#### Pit 9 (図6)

土坑2に近接した径20cmのPitである。検出面からの深さは20cm。埋土は暗灰色粘質微砂で、炭が混入。土器等の出土が認められるが、細片で詳細の観察は不可である。

#### Pit10 (図6)

調査区西半で検出された長径30cm、短径25cmを測るPit。検出面からの深さは25cm。埋土は、Pit 9と同様で暗灰色粘質微砂、炭を含む。埋土から土器2点が細片ながら出土している。1点は椀の口縁部細片であるが、13世紀前半の土師質土器椀の一部と思われる。遺構の年代も13世紀前半ごろとして良いであろう。

#### 柱列 (図11)

柱穴1・2で柱列を構成する建物の一部と思われるが、基礎による損壊と調査区外へと続くため、全体像はわからない。柱間の心々距離は1.8mほどである。各柱穴は、1が方40cmの隅丸方形、検出面からの深さ23cm。控えに小礫が詰められていた。2は方30cmの隅丸方形、検出面からの深さは30cm。両柱穴とも埋土に炭及び土器片が混在していた。平面形状は隅丸方形としたが、円とも方ともそれら形状である。

出土土器は、柱穴1が土塙口縁部分を含む

14点、柱穴2は小皿の底部や丹塗り土器片を

含む9点、いずれも細片である。1の土塙口縁部は、Pit 6出土の土塙の口縁形状と比較すると、やや後出するものの大差ないようと思え、13世紀末～14世紀初頭ごろに比定できる。2には、年代の根拠として積極的に採用できる土器片に欠けるが、柱穴1よりは古手の破片それも細片に限られる。一応同時期と判断しても支障ないであろう。

柱穴1・2とPit 6はほぼ延長線上に位置するが、柱穴1-2間が1.8mであるのに対し、柱穴2-Pit 6間は2.3mと間隔があきすぎている。その程度の誤差は許容しうるとすれば、これらは同一建物の一部を構成する柱穴と想定することは可能である。なお、建物は柱1-2が棟方向とすれば、磁北に対して35° 東偏している。

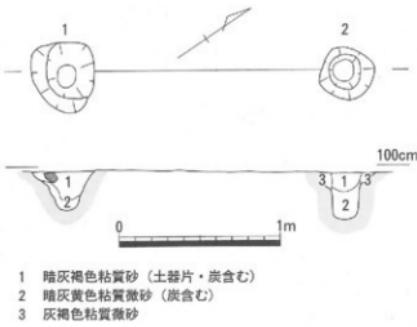


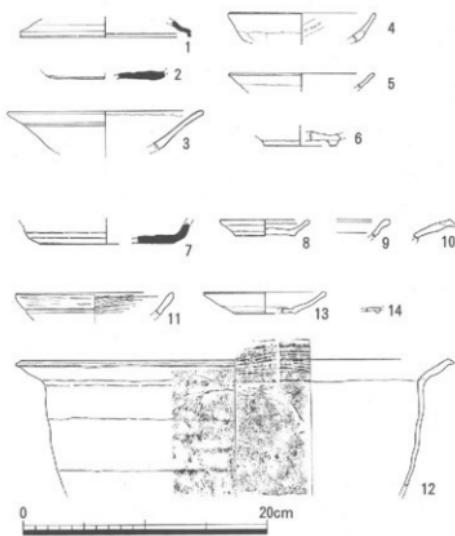
図11 柱列 (1/30)

### 井戸 (図13、図14・15)

調査区の北西隅で検出された。大半は調査区域外へ広がるようで、掘り下げが出来たのは全体の1/4程である。当初、溝の一部との認識で調査していたが、最終的に曲物の検出を確認して井戸と判断した。

出土物は1~4層を井戸上層、それ以下を井戸下層と認識して取りあげている。下層である5~9層は、非常に粘質が高く、シルト・粘土が主体となっている。井戸が徐々に埋っていき、最終的に放棄され埋没した様相が見て取れ、上層の1~4は、井戸が廃絶された後に、一気に埋められた埋土あるいは客土と思われる。土器等も細片の多さが目に付いた。

上層の土器は図14、15~22は土師質土器壺の高台部。高台径3.8~5.2cmとばらつきが認められ、高さは低平である。20・22には高台接地部に



土坑1 (1~6)、P1 (7)、P3 (8)、P4 (9・18)、  
P6 (11・16)、P7 (13・14)

図12 土坑・Pit出土物 (1/4)

| 番号 | 出土遺物 | 種 別     | 發 形 | 保存状況    | 法長(cm)                         | 油 土                              | 焼成           | 色 調   | 成形の特徴   | 備 考               |
|----|------|---------|-----|---------|--------------------------------|----------------------------------|--------------|---|---|-------------------|
| 1  | 土坑1  | 直 筒 器   | 器蓋  | 略崩      | 口徑: 14.0                       | 無砂粒 (長石・石英既<br>含む) 多し            | 良好           | N6/6 (赤)  | 横ナデ   |                   |
| 2  | 土坑1  | 直 筒 器   | 器身  | 底盤: 1.8 |                                | 0.5~1.0mm大の砂粒<br>既含む             | 普通           | N7.4/6 (赤白)   | 内底面: 横ナデ、ヘラナデ?<br>外底面: 未調査                                |                   |
| 3  | 土坑1  | 白 磁 壺   |     | 1/3切    | 口徑: 16.0                       | 0.5mm大の砂粒多く<br>少々風化既含む           | 良好           | 黄・黒: MY87B/1 (灰白)<br>銀面: LMY87A/1 (深灰黒)               |   |                   |
| 4  | 土坑1  | 土師質土器   | 縦剖面 | 鏡面      | 口徑: 12.0                       | 0.5~1.0mm大の砂粒<br>既含む             | 良好           | LEYTB/1 (灰白)、部分的<br>にL5YTR/3                          | 内底面: ヘラナデ<br>内底面下平: 頂江面                                   |                   |
| 5  | 土坑1  | 土師質土器   | 盖?  | 鏡面      | 口徑: 12.0                       | 無砂粒合む                            | 良好           | MY97T/1 (灰白)  | 内外面: 横ナデ  |                   |
| 6  | 土坑1  | 土師質土器   | 高台部 | 鏡面      | 高台径: 8.0                       | 1mm大の砂粒、長石<br>多い、少々風化既含む         | 普通           | 黄・黒: MY87B/1 (灰白)<br>銀面: LMY87A/4 (浅灰黒)               | 高台は押されて変形してい<br>る。高台径は平均値                                 |                   |
| 7  | P1   | 直 筒 器   | 蓋   | 1/3切    | 底盤: 11.0                       | 無砂粒多く、1mm大<br>の砂粒既含む             | 普通           | 岩・断面: N7.4/6 (灰白)<br>裏: N6/6 (赤)                      | 内外面: 横ナデ<br>底面: ヘラ切りのちナデ                                  |                   |
| 8  | P1   | 土師質土器   | 小壺  | 1/2切    | 口徑: 8.8<br>底盤: 4.8<br>高さ: 1.4  | 砂粒を含み、元2~4mm<br>の砂粒も既含む          | 普通           | L5YTR/2 (灰白)  | 内外面: 横ナデ<br>底面下平: ド司引                                     | 施内面の一帯が灰褐色に變<br>色 |
| 9  | P1   | 土師質土器   | 壺   | 断面不可    | 短いL字型の凹凸有<br>る                 | 普通                               | LEYTB/1 (灰白) | 口縁周外が強くナゲられ、口盤部が肥厚<br>する                              |   |                   |
| 10 | P1   | 土師質土器   | 瓶口縫 | 照片      | 計測不可                           | 長石、石英既含<br>む (0.5~1mm) 多く既含<br>む | 良好           | 黄: 3YR7A/1 (赤)<br>表: 3YR7B/2 (赤黒)<br>裏面: 10Y8A/4 (黒赤) | 内側: 橙紅色の底<br>外側: 白目白のちナデ<br>口縁部: 横ナデ                      |                   |
| 11 | P1   | 内 黑 土 器 | 灰口縫 | 1/1切    | 口徑: 12.0                       | 0.2~0.5mm大の砂粒<br>既含む             | 普通           | 3.9/3 (黒)<br>表: 3YR7A/2 (灰黒)<br>裏面: 10Y8A/4 (黒赤)      | 内面: 黒色既含む。黑色底盤の浸透度は0.2m<br>m。斜めのL字型が施され光沢を帯びる。<br>底面: ド司引 |                   |
| 12 | P1   | 土師質土器   | 壺   | 1/3切    | 口徑: 16.0                       | 3mm大の砂粒多く、<br>石英、石英の既含む合<br>む    | 良好           | 黄: 3YR7.2 (灰白)<br>裏面: 10Y8A/1 (黒黒)                    | 外底: 深灰色<br>内面: 施方底の板状目、板目は口縁部が良<br>く、削痕は無かい。              |                   |
| 13 | P1   | 土師質土器   | 小壺  | 1/3切    | 口徑: 10.0<br>底盤: 5.2<br>高さ: 1.4 | 無砂粒多く、0.5mm<br>大砂粒も少含む           | 普通           | 3.9/3 (黒)<br>表: 3YR7A/4 (灰白)<br>裏面: 3YR7B/6 (明<br>赤)  | 内側面: 横ナデ<br>外底面下平: 頂江面                                    |                   |
| 14 | P1   | 土師質土器   | 高台部 | 鏡面      | 計測不可                           | 無砂粒多く、0.5mm<br>大砂粒も少含む           | 普通           | 3.9/2 (黒)<br>表: 3.5YR7.2 (灰白)<br>裏面: N6/6 (赤)         | 高台中斷三脚形を呈す  |                   |

表2 出土物観察表 (1~14)

押圧痕が認められる。23は椀であるが、赤褐色を呈し外面に削り痕？が認められ、他の中世土器とは色調・胎土とも異質である。古墳時代土器の可能性がある。24・25は小皿。24は暗褐色を呈し外底面の一部に油煤が付着している。12世紀代の小皿か。26は椀の口縁部である。口唇部が黒味を帯びている。備前焼Ⅱ期に見られる椀に類似する。28・29は羽釜。28は褐色を帯び瓦質的ではないが、胎土堅さ等は瓦質と同様である。鍔の形態に若干の差が認められるようである。30～32は鉢類。30は砂粒を多く含んだ土師質土器で、底面から胴部下半にかけて煤が付着している。31は捏ね鉢であろうが、内面に浅い条痕が残されている。32は東播系の捏ね鉢。いずれも13世紀～14世紀代に位置づけられよう。33・34は平瓦片、煤が付着している。35～38は輪入陶磁器類である。35は青白磁の合子。36は鎌蓮弁の一部とおもわれる文様が認められる青磁碗の破片。37・38は白磁碗の底付近の破片。37には双葉の先端様の文様が浮き彫りされている。

これら上層の土器類は、土師質土器椀から13世紀後半～14世紀初頭のものが混在していると想定できる。また、他の遺物から得られる年代観とも矛盾はない。

下層の出土物は図15。39は須恵質の鉢で、口縁部が黒色を帯びる東播系口鉢であろう。40～42は土師質土器椀である。高台の径は5.4cm程であり、上層と比べるとやや大きい。また高台高も高くしっかりした作りである。ただし、40は高台が著しく縮小した段階の体部であろう。43は小皿で口径6.6cm。44は瓦質塙の脚である。45・46はやや黄味がかっているが白磁である。46の内底部には圓線状沈線が彫られている。47～50は木製品。47は容器の底、49・50は曲げ物の側材。内側には綴、斜めの刻みを入れ曲げやすくしている。また端部には木釘を打った痕跡かと思われる小孔が見られ、さらに少なくとも3個所桜皮で綴じ、固定している。この木製品類は、バックホーによる機械掘りのため詳細な検出状況は把握できなかったが、井戸側と添え木として利用されていた可能性がある。

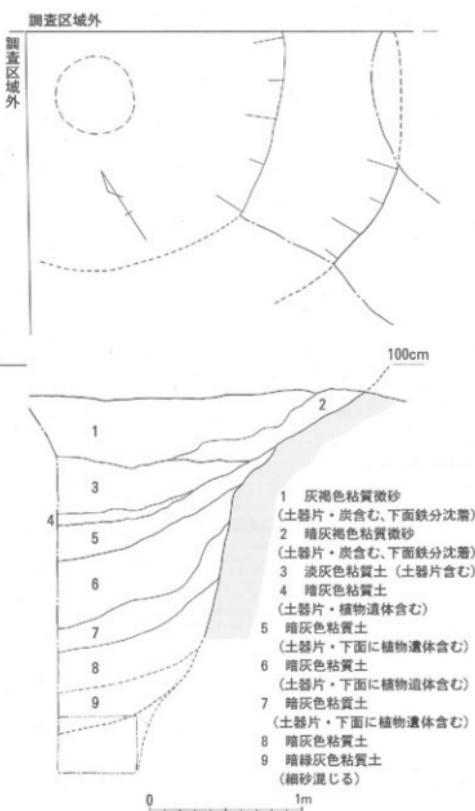


図13 井戸 (1/30)

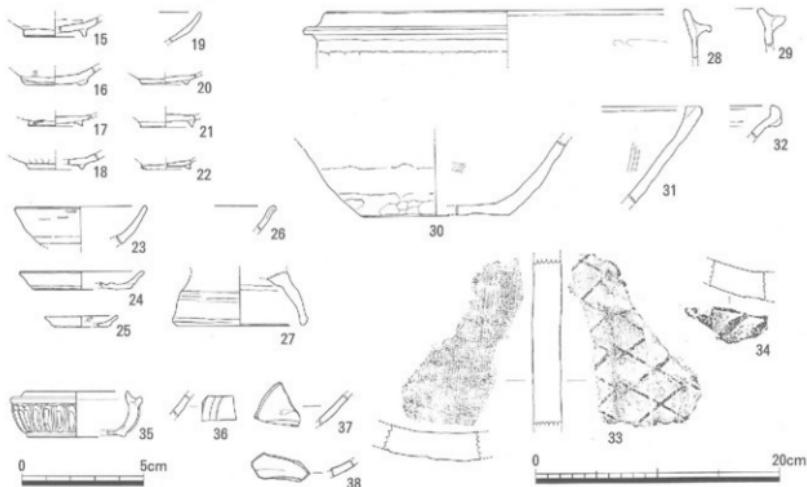


図14 井戸出土物（1/4、ただし35は1/2）

表3 出土物觀察表（15~38）

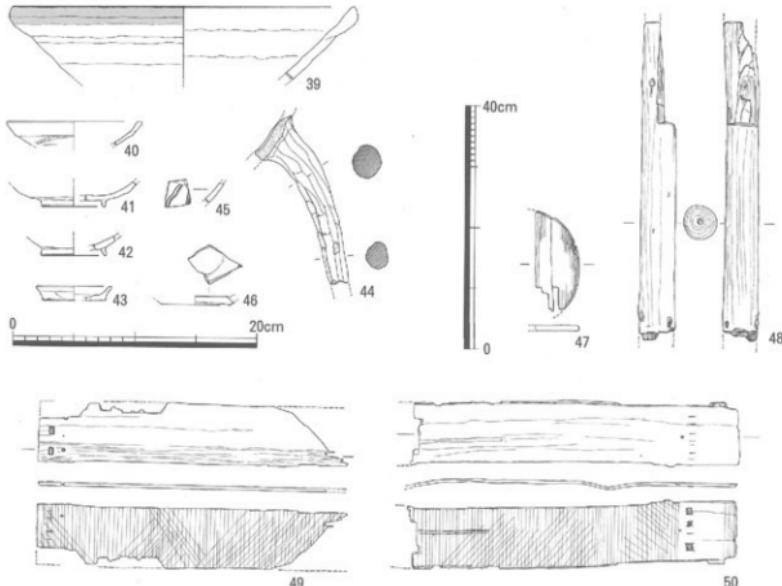


図15 井戸（下層）出土物（1/4、ただし47~50は1/8）

| 番号 | 出土遺物 | 種 別     | 形 細       | 保存状況   | 測量(cm)                     | 器 士                                     | 構成                                       | 色 調   | 成形の特徴                                   | 備 考      |
|----|------|---------|-----------|--------|----------------------------|---|--|---|---|----------|
| 39 | 井戸下層 | 陶 瓦 質   | 斜面鋸       | 1/10片  | 口径：28.5                    | 0.5~1.0mmの大砂粒、<br>石片、長石片を含む。サ<br>ラサゴ法あり | N3/9(赤白)、一部N7/0(灰<br>白)<br>N3N2/9(黒)     | 木板約2mmの剥離部、<br>口縁部は焼けた。外側<br>には指柱跡が残す   | 口縁部外側は黒く発色。内<br>側一部に煤化斑。灰張瓦             |          |
| 40 | 井戸下層 | 土陶質土器   | 瓦         | 1/12片  | 口径：11.0                    | 黑色無釉含む                                  | 直軸<br>堅肉                                 | 上LY8/1(灰白)  | 内側：ヘッカナデ<br>外側：板目模様あり                   |          |
| 41 | 井戸下層 | 土陶質土器   | 燒面瓦       | 1/3片   | 底径：5.4                     | 後砂粒、1mmの大砂<br>粒を含む                      | SYM/1(黒), 一部SYW/<br>焼面法あり<br>削痕：N3(赤白)   | 内部：ヘッカナデで平滑化。<br>外側：ヘッカナデ   | 根込みに高台の板状突起及び<br>変色あり                   |          |
| 42 | 井戸下層 | 土陶質土器   | 燒面瓦       | 1/5片   | 底径：5.4                     | 後砂粒含む                                   | 直軸<br>堅肉                                 | SYM/1(黒),<br>削痕：N3(赤白)  | 高台部模様ヘッカナデ                              |          |
| 43 | 井戸下層 | 土陶質土器   | 小瓶        | 1/3片   | 口径：4.6<br>高さ：1.3<br>底径：3.8 | 微砂粒含む、1~1.5mm<br>以上の礫も若干含む              | 直軸<br>堅肉                                 | 赤D9/8(赤) (焼面)<br>削痕：7.5SYW/1(灰白)  | 焼アクリル、<br>外縁部へラッ切り                      | 外底部に墨痕あり |
| 44 | 井戸下層 | 瓦 質 土 器 | 焼繩        | 破片     |                            | 0.5~0.8mm大砂粒、<br>長石、石片、雲母片多<br>く含む      | 表：N4/1(赤)-N2/0(褐色)<br>裏面：N8/0(灰白)        | 断面は繩引された柱割あり、のち方角的<br>へラッカ。高面で擦し銀色を呈す   |   |          |
| 45 | 井戸下層 | 白 瓦 土 器 | 繩片        |        |                            | 燒面土、黑色微粒を<br>多く含む                       | 7SYT/1(黒)<br>削痕：N7/1(黒)<br>削痕：7.5YT/4(黒) | 内部に平行弦線による攝出あり  | 物語は薄く、表面・ヒビが<br>ある。                     |          |
| 46 | 井戸下層 | 白 瓦 土 器 | 1/6片      | 底径：5.8 | 焼面土、黑色微粒を<br>含む            | 直軸<br>堅肉                                | 物：N8/0-2.5YW/2(褐色)<br>削痕：7.5YW/2 (灰オーブ)  | 外底部衝撃痕、表面無特、輪は厚い延溝で<br>0.5~0.7cm  | 内底部に圓形の沈落がめぐる                           |          |
| 47 | 井戸下層 | 木 材     | 板材        | 1/5片   | 径：19.0                     |   |  | 材質：杉  | 瘤毛あるいは節眼の模様                             |          |
| 48 | 井戸下層 | 木 材     | 板材        | 径：5.5  |                            |   |  | 地盤から17mほど、片側半分には、なた枝<br>上端で束で垂れています。  | 用途不明                                    |          |
| 49 | 井戸下層 | 木 製 品   | 直角切削<br>板 | 裏片     | 幅：約16<br>厚さ：0.8            |   | 直軸<br>直角                                 | 井戸（内壁）に接・斜め方向に切り出<br>されている。その付近に深さ3mmほどの<br>貫通孔がある。この丸孔は板の芯端部にも<br>認められるが、こちらはばかりで西廻し<br>している点である。木製板か？ | 板・板は同じ材料の繩で<br>繩引。30cmの距離が上に置<br>かれている。 |          |
| 50 | 井戸下層 | 木 製 品   | 直角切削<br>板 | 裏片     | 幅：約16<br>厚さ：0.8            |   |  | 30cmの距離から4cmばかりの場所にも貫通孔<br>がみられる  |   |          |

表4 出土物観察表（39~50）

井戸下層からは、13世紀代の出土土器片の数量が若干多めになっていること、また大きめの破片が顕著となる傾向があるものの、上層と同様に14世紀初頭頃の遺物も一定量出土している。したがって、13世紀代に掘削使用され、14世紀初頭まで機能していた井戸であり、その後廃棄され一気に埋められたものと判断できる。

### 3 遺構に伴わない出土物（図16）

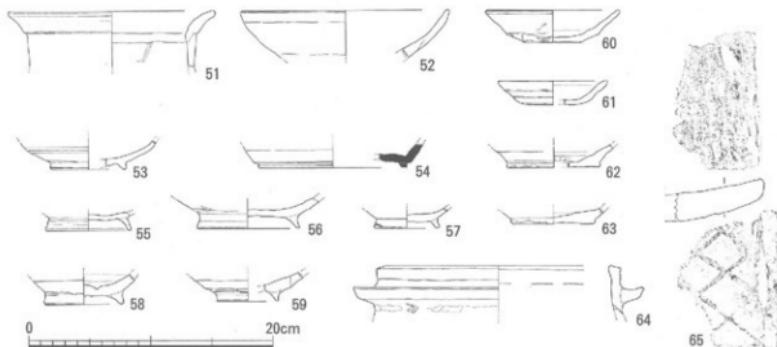


図16 遺構に伴わない出土物（1/4）

| 番号 | 出土遺構 | 種 別  | 器 形 | 保存状況 | 大きさ(cm) | 種 土 | 焼成            | 色 調 | 成形の特徴           | 備 考 |
|----|------|------|-----|------|---------|-----|---------------|-----|-----------------|-----|
| 51 | 臼底土  | 印文土器 | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 52 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 7.35Kg(1.6kg) | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 53 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 2.85Kg(1.6kg) | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 54 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 55 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1.25Kg(0.6kg) | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 56 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 57 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 58 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 59 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 60 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 61 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 62 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 63 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 64 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |
| 65 | 臼底土  | 土器底? | 碗   | 1/6件 | 口径：17.0 | 普通  | 1070℃(未明記)    | 青磁  | 表面荒れ、巻く調査等の判別不可 |     |

表5 出土物観察表（51～65）

旧耕作土下から、あるいは中世の遺構検出面からも、土器類が出土している。基本的に須恵器、土師器、黒色土器片等は、中世遺構の検出作業及び基盤層掘り下げ過程で出土したものである。遺構に伴うものではないが、周辺の遺跡状況の参考となるので紹介する。

弥生土器片(51)は調整痕等の観察が困難なほど磨耗しているが、形状はよく残している。細片のため傾き等は検討の余地を残しているが、口縁部と頸部の境に削り出しによる段が明瞭に観察でき、弥生前期前半の土器<sup>(1)</sup>であることは疑いない。土器の磨耗度からすると、当調査区下層に弥生前期遺構の存在を主張するには躊躇されるが、鹿田遺跡が形成されている微高地に所在していた可能性は認められよう。

古墳・古代の遺物には、土師器碗(52)、綠釉陶器(53)、須恵器杯(54)、丹塗り土器等が出土している。黒色土器碗片も少なからず検出されている。Pitなどの遺構も検出されていることからも、当微高地上に10世紀代の遺跡が形成されていたことは確実であろう。

53は綠釉碗であるが、破片も大きく残存状況も良い。削りだし輪高台で、緩やかに内弯して立ちあがる碗である。全面に薄く施釉されているが輪高台内面は無釉である。また、体部内外面には部分的に群雲状の斑点が見られる。高橋氏の整理による編年<sup>(2)</sup>ではV期(10世紀後半)になろうか。畿内産と思われる。54の高台部はシャープに欠け、焼成もあまり。8~9世紀の須恵器杯と判断。

55~59は、古代・中世が混在しているが土師質土器の碗。特に55は内黒土器であり、胎土は黄褐色系。高台は高く形成されており10世紀中頃であろう。57は土師質土器碗で13世紀後半ごろ。56・58・59は褐色系胎土の土師質土器碗か皿の高台部。60~63は皿ないし杯底部である。64は瓦質ではなく土師質であるが銅付きの壠(釜)。摂津C型の特徴<sup>(3)</sup>を示す。瓦の破片も出土している。

瓦(65)は大菱タタキ目で成形して、焼成は硬く須恵質を呈する。これら瓦は、煤の付着がみられ、一部焼けた痕跡もある。岡山大学医学部構内からもこの種の瓦の出土がみられるが、建物周辺でまとまって出土する状況では無い。溝や井戸からの出土が顕著であり、消失した瓦葺建物を整理した際に、溝や井戸等に投棄された状況と想定できようか。

#### 4 まとめ

今回の発掘調査で判明した、当該地の遺跡概況および留意点を確認しておく。

1. まず、旧建築物の基礎地形の影響が無視できず、良好に遺構面が検出されたとは言えない。杭や地中梁などの残がいが縦横に残されていて、検出された遺構も途切れたり、あるいは完結した状態とはならなかった。したがって、調査地における検出遺構の性格や、遺跡の全体像が明らかになつたというには程遠い。そのような条件下にあっても、古代末・中世と2時期の遺構面が確認でき、当該地の北側に広がる岡山大学医学部構内における古代・中世遺跡の展開が、この地にまで広がっていることが明らかになった。また、遺物の出土だけであるが、弥生前期土器片の検出は、鹿田微高地形成時期の一資料を提供することとなった。

鹿田遺跡は弥生中期後半に盛期を迎える。しかし、単発的ながら縄文中期土器<sup>(1)</sup>や縄文後期・晚期土器<sup>(2)</sup>が出土することから、縄文期後半には人が活動できる条件にはなっていた。このことは、当該地が居住域として適地でなかったにせよ、活動領域として認識されていた可能性を示唆するものである。

たしかに鹿田遺跡が本格的に遺跡展開する時期は、弥生中期後半以降である。しかし、当地で弥生

前期土器が出土<sup>(1)</sup>したことは、鹿田遺跡周辺で晩期から前期、そして中期と時間的な継続性が辿れることになり、鹿田遺跡興隆の前兆として、弥生前期遺構の所在を想定できることを暗示している。そして鹿田遺跡を興した弥生人が、隣接する天瀬遺跡からの居住民<sup>(2)</sup>であったにせよ、津島・南方遺跡の居住民と深い関わりのもと展開したにせよ、すでにこの地で経済的な基盤を醸成していた下地があったからこそ、その後の遺跡形成が可能であったとみなせることになる。

2. 古代に属する遺構は土坑2とPit1だけであって、その性格等は残念ながら当調査地内では不明とせざるを得ない。一方、中世遺構はある程度様子が把握できる状況であった。

中世に属する遺構としては井戸と柱列がある。井戸は、土層堆積状況から徐々に埋没していったと想定されるが、一端廃棄されると一気に埋められたらしい。井戸埋土からは祭祀の跡をおもわせる楕・皿類が大量に出土することもなく、遺物からの情報は豊富とは言えなかった。しかし井戸および柱列の存在は、当地が集落のはずれとするイメージよりは、居住空間に近い場所であり周辺に屋敷等が所在する、あるいは屋敷地内と想定するに十分であろう。

岡山大学医学部構内における調査では、古代末～中世に、溝で囲まれた数棟の建物と井戸で構成された屋敷地が想定されており、このような屋敷地が複数所在して鹿田遺跡を形成していたとされる。この建物や溝の方向性は、時代性や性格を反映しているようで、ばらつきが見られ一定していない。ちなみに図17に医学部構内の調査で明らかとなった建物・溝の方位をまとめてみたが、そのばらつきの様子が理解できるであろう。そして巨視的に見れば、建物や溝は磁北方位というよりは、鹿田条里地割の方位に集中している状況を読みとることは可能である。条里地割に沿った溝の埋没年代から、現在の鹿田地区周辺の条里地割は中世以前まで遡る可能性が想定<sup>(3)</sup>されている。この建物方位のばらつき度は、宅地の方向性、道、溝などまさに条里地割の制約下にあり、その制約下での変異を表していることになる。

当調査区で検出された柱列の方向は、N-35°-E。建物の向きとしては、直交するN-55°-Wも候補にあがる。この方位は、医学部構内第6次調査（アイソトープ総合センター予定地）で検出された13世紀頃の建物4・5<sup>(4)</sup>と一致する。鹿田遺跡全体から見れば、この方位を示す建物はまだ少ないが、鹿田遺跡内の建物と同様の制約下で建てられた可能性は高いと言える。

たしかに鹿田遺跡では中世集落の一端が検出されており、具体像が浮かび上がりつつある。しかし、その全貌は未だ明らかにしがたい。少なくとも、区画された屋敷地が複数所在していることは確認されるし、その一端がこの調査区にも広がっているとの想定も可能となった。試掘坑A・Eの内容を勘案すれば、屋敷地の検出や建物等の配置・構成がある程度把握できるとの感触を得たのである。

3. 当調査区からは、在地産の土器類だけでなく、他地域産の土師器類、縄釉陶器、輸入磁器などの出土も認められる。豊富で多種類にわたる出土物は岡山大学医学部構内でも確認されることで、鹿田遺跡の特徴を際だたせている。九州と近畿を結ぶ大動脈であった

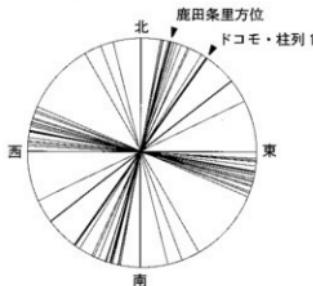


図17 鹿田遺跡の建物方位

瀬戸内海航路と、備前国を南北に流れる旭川の河口とに位置する鹿田遺跡は、瀬戸内海や旭川を媒介とした流通網の結節点として機能していたのであるし、鹿田遺跡北半に広がる可耕地と旭川の河川交通、そして瀬戸内海航路への利便性から、藤原氏長者の殿下渡頭の一つに編入されることになった<sup>(12)</sup>と想定できるのである。その視点から、鹿田地区周辺の遺跡についても検討および評価をしていくことは重要であろう。

4. 鹿田遺跡から大菱タタキ瓦（当遺跡井戸からも出土）がまんべんなく出土することが知られているが、その瓦が葺かれていた建物跡などはまだ特定されていない。ただ医学部構内第6次調査で大量の瓦が出土したこと、および銅碗・板碎片？が出土していることから、第6次調査個所周辺には通常の農村とはやや異なる性格の集落が形成されていたか建物が建てられていたと想定されている<sup>(13)</sup>。当時瓦葺建物といえば寺院があるいは役所的な建物と想定できるが、ここで留意しておきたいことは、この瓦類が埋没していた遺構の年代である。若干の年代差が想定されるようだが、圧倒的に13世紀末～14世紀初頭ないし前半とする年代に収斂するようだ。

その瓦片の多くは煤が付着した状況にある。すなわち鹿田遺跡は、14世紀初頭頃に火事により広い範囲にわたり建物が焼失する事態をむかえた。そしてその被災地の整理および整地作業を行ない、再び集落を復活させてきたのであると想定ができる。

この被熱大菱タタキ瓦片は、旭西平野の西端に位置する田中地区の包蔵土<sup>(14)</sup>から、13～14世紀代の輸入陶磁器や土師質土器などとともに混在して出土する。瓦葺きの建物が田中地区に建立されたことは確かである。瓦葺建物といっても大規模な寺院を想定するまでもなく、阿弥陀堂や太子堂的な小堂、祠の場合もあったであろう。旭西平野南部の中世遺跡においては、恐らく集落ごとに信仰の対象となるそのような瓦葺建物が結構普及していたのではないか。田中地区からは瓦経も発見<sup>(15)</sup>されており、そのような想定も充分あり得ることであると思う。

田中地区は当時海岸に近い集落であったが、一帯は西野田保に属し、1188（文治4）年に備前吉備津宮領から地頭職に知行されたとされる<sup>(16)</sup>。現在は笹ヶ瀬川に面し、近世に港として機能していた今保は対岸であり、田中地区も同様な性格を持った集落が所在していたと思われる。そして、時期の限定ができないので想めいたことになるが、13～14世紀ごろに少なくとも旭西平野単位の広い範囲で、自然災害か人の騒乱かは断定できないが、被災をうける出来事があり、その後集落の再編が実施されたのではないかと想定するのである。このことは、岡山城下<sup>(17)</sup>でも13世紀代に埋没した大溝が確認されているし、津島岡大遺跡の成果からも、14世紀代に単なる造成だけでなく、用排水路も含めた土地の再編が行われた可能性が指摘<sup>(18)</sup>されるなど、やはり一集落の変遷とかの範疇ではなく、広域にわたり影響を及ぼした土地整理、土地制度の再編成が行われたのではないかと想像を巡らせるのである。この契機がなによによるのかの絞り込みが要求されようが、今のところ特定できる材料を見出せない。概略では、北条氏支配の衰退と崩壊に伴う政治情勢の混乱と再編成に起因すると考えると興味深い。

## 註

- (1) 「土師質土器碗」とは、岡山県においてかつて「早島式土器」と呼ばれていた土器碗を指す。岡山県から広島県東部の沿岸地域に分布しており、形態・手法などにおいて他の地域の土師質土器碗と明確に区別される特徴を共有している。しかしその名称は、資料としての実態が不明瞭であり、研究者によって

定義が異なるなど曖昧であり厳密性に欠けるとされる。そのため「早島式土器」と呼び慣わすのに適当ではないと評され、最近では橋本久和氏の提唱を契機に「吉備系土師器碗」が周知されているが、「吉備型土師器碗」、あるいは「吉備系土師質土器」とも呼ばれている。どの名称を用いるかは、この土器碗の成形方法やその技術系譜、そして成立の歴史的意味づけなどの評価に直結しているため単純ではない。ただ「吉備」と冠称するのは、汎日本の視野に立って、他地域の動向との区別を明確にし、地域性の正当な評価を見極めようとの判断が働いているからであろう。

古代末～中世の吉備地域における主たる椀生産を垣間見ると、東部の備前焼、山間部の勝間田焼、備中の「吉備系土師器碗」などが認められ、吉備地域で一様な様相を示している状況とは言えない。備前焼・勝間田焼は須恵器から変遷し成立しているが、碗を生産している。一方、備中には須恵器の技術系譜にある龜山焼が操業していたにもかかわらず碗は生産されていなかったようであり、そのかわり「吉備系土師器碗」が盛行する。それぞれの工人の存立基盤の制約下で碗生産は展開をしているようである。結局土器碗は「吉備系土師器碗」に集約して衰退していくようあるが、成立期に於ける吉備での土器碗生産の地域相も一樣ではなさそうで、未だ議論の余地があると思われる。とするならば、日本中世土器研究会に集結している研究者らの研究成果を積極的に評価しつつも、「吉備系」と冠するにしろ「吉備型」と冠するにしろ、吉備における土器碗の動向を総括的に把握できる概念ではあるが、当該地域での土器碗の実相を的確に表現している呼称とはおもわず、その名称の積極的な使用に消極的なならざるを得ない。私は、備中で早くから注目されていた「早島式土器」の名称を、その定義を厳密に絞り込み理解そして使用する立場であるが、その名称を用いたからといって、多様な土器碗の実態が整理され解明されているわけでもないので、ここでは、かつて用いていた表現である「中世土師質土器高台付碗」を「土師質土器碗」と略述して報告している。しかし、いわゆる「吉備系土師器碗」のことである。「吉備系土師器碗」の評価をめぐる経緯は、文献を挙げていないが、『中近世土器の基礎研究』に掲載されている一連の論文を参照していただきたい。

- (2) 鹿田編年Ⅲ-3 土師質土器の年代観は、以後隣接する岡山大学医学部構内の鹿田遺跡での調査成果に準拠する。当遺跡に近接しておりかつ豊富な資料を駆使して、精度の高い編年を確立していると判断するからである。
- 山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3-第5次調査-』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (3) 山本悦世 1997「岡山県南部における土師質鍋の変遷-中世前半期における鹿田遺跡の場合-」『鹿田遺跡4-第6次調査-』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (4) 秋山浩三 1992「弥生前期土器-遠賀川式土器の地域色と吉備-」『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社の第1期
- (5) 高橋照彦 1995「縄粗陶器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- (6) 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢(奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集)』同朋舎
- (7) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993「鹿田遺跡3-第5次調査-」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 302頁 第1地点出土縄文中期土器(船元II)
- (8) 訂7前掲書 117頁 第1地点土壤268、 254頁 井戸20
- (9) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988「鹿田遺跡I」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊土壤

- (10) 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3－第5次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (11) 註 9 前掲書 354頁
- (12) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997「鹿田遺跡4－第6次調査－」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 34・35頁
- (13) 草原孝典 2002「結語」『新道遺跡』岡山市教育委員会  
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2005「鹿田遺跡と「鹿田庄」」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報・34
- (14) 松木武彦 1997「結語」『鹿田遺跡4－第6次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (15) 犬飼秀哉『岡山市田中の歴史発掘』(私家版) 田中地区の区画整理事業に伴って、岡山市教育委員会が一部立会調査を実施した。田畦部分に中世遺物を含む包含層が検出されている。その遺物の中に輸入陶磁器、瓦器櫛、大麦タキ瓦等も出土した。14世紀以降のある時期に、遺物包含層を削平するような大がかりな水田開発が実施されたことは確実である。
- (16) 間壁忠彦 1993「備前沢田、備前田中、備後西国寺の瓦経をめぐる」『考古論集』潮見浩先生退官記念会
- (17) 藤井駿 1980「備前南部の諸荘園」『吉備地方史の研究』 山陽新聞社(初出1966年『岡山市史(産業経済編)』『岡山周辺の諸荘園』)
- (18) 岡山市教育委員会 1998「岡山城二ノ丸(中電変電所)跡(中電2次)」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1996(平成8年度)』
- (19) 岩崎志保・山本悦世 2003「結語」『津島岡大遺跡11－第10・12次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 356頁

## IV ま と め

### 1. 旭西平野南部における旧微地形の復元

旭西平野南部には、弥生時代～中世にかけて遺跡の形成が認められる場所がある。特に天瀬と鹿田周辺は、從来から遺跡の所在が周知されている地域である。その周辺における発掘調査ないし試掘調査等の実施箇所を図18に投影し、その土層堆積状況から微高地の範囲を想定してみた。同じような作業は、かつて草原孝典氏が新道遺跡<sup>(1)</sup>との関わりで試み一定の成果を得ているが、ここではやや範囲を広げて表示している。遺跡形成の認められる微高地はおよそ3区域で確認できる。それぞれ、東からI. 天瀬・新道微高地、II. 鹿田微高地、III. 鹿田本町微高地と呼び、詳細を見てみよう。なお、図18で表示している試掘坑の番号と図19の土層模式図の番号とは対応しているので、以下「土層坑1・2」と表記して説明する。

#### 1. 天瀬・新道微高地

天瀬・新道微高地は、岡山市民病院の敷地を中心として、北は一般国道2号線あたり、南は清輝本町まで広がっていると思われる。特に天瀬遺跡周辺は、市民病院の病棟新築の際に発掘調査<sup>(1)</sup>が実施されており、弥生中期からの安定した微高地の形成が判明している。岡山市民病院に隣接（土層坑2・3）する場所でも、やはり微高地と遺構が確認されており、当地周辺に一定の広がりを持った微高地と遺跡の形成が認められる。

縁辺の状況は、天瀬交差点から大雲寺交差点に至る京橋共同溝建設工事に伴う一連の発掘調査により、実情が把握されている。その東半<sup>(3)</sup>では弥生後期の微高地が確認されている。さらに、天瀬交差点北側<sup>(4)</sup>では洪水砂で覆われた弥生後期と想定される水田跡、また、岡南共同溝の大雲寺交差点堅坑<sup>(5)</sup>でも水田跡が検出されている。この状況は、明らかに一般国道2号線付近が天瀬・新道微高地の北限域であることを示していると同時に、弥生後期にはその微高地北縁が水田域となっている状況も読みとれるのである。

微高地の北東部にあたる天瀬ポンプ場では、微高地斜面ないし落ち部分から弥生中期の土器が採集されたとのことであり<sup>(6)</sup>、また、土層坑1も微高地端部すなわち東限の様相を示すものと思われる。

南限に関しては、弥生時代の安定した微高地という点からすると、清輝橋交差点付近の岡山記念病院までは広がらず、その北130mほどに位置する場所での包蔵土層確認が今のところ南限を示す。というのは、岡山記念病院の改築の際に中世の微高地は確認されたが弥生土器等は検出されなかつたし、その状況は新道遺跡でも同様であった。さらに南に位置する二日市遺跡<sup>(7)</sup>では、弥生後期末ごろの土器が出土しているが、それほど安定した微高地基盤ではなくむしろ湿地ないし水田の状況を示していた。二日市遺跡の南に隣接する岡輝公民館の敷地では、湿地であり土器の混入も認められなかつたからである。しかし、古代～中世になると、新道遺跡・二日市遺跡でも井戸、柱穴が検出され、ある程度安定した微高地を形成している。

これらの状況から、天瀬遺跡周辺がまず居住域として開発され遺跡が展開していき、その後、微高地の形成が南に広がるにつれ、徐々に居住域も拡大していく姿が捉えられるのである。天瀬から二日市にかけては、旭川下流域に沿って形成された自然堤防にあたり、そこに営まれた遺跡群が展開し

ている状況と言える。

新道遺跡は、この微高地の西限域を示している様相と思われる。

天瀬・新道微高地の概略は上記の通りであるが、さらに大溝や小河道が随所に走行しており、様相は複雑である。

## II. 鹿田微高地

岡山大学医学部構内は鹿田遺跡の中心部と見なされている。その構内は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターにより継続的に発掘調査が実施されており、各時代に渡る遺構等が確認・把握されている<sup>(1)</sup>。一連の報告によると、岡山大学医学部構内は、基本的に安定した微高地が存在し、弥生中期以降には遺跡の形成が可能であった土地である。旭西平野南半部では恐らく最も安定した微高地の一つであったと思われる。もちろん構内においても、微高地の起伏は見られ、低地・河道・水田域が認められる。概して、東南端がやや水田・湿潤地の広がる傾向にあり、微高地の南限域を示している。土層坑16はさらに南の状況であるが、ここでは土器包蔵土に対応する土層は見られるものの、明瞭な基盤土は認められない。微高地周辺部の湿潤な土地柄を示している。また、今回報告しているNTTドコモ地内の南端も、微高地端部の状況を示している。

一方、疫神社南方の土地（土層坑15）では安定した微高地基盤が認められるから、医学部構内を中心に広がる微高地は南北方向に広がって形成されていることが窺われる。

北側は、医学部構内から50mも離れていない大学町で、ビル建設の際の立会によると包含層ないし微高地は検出できず、粗砂層が広がっていた。河道の状況と想定される。また、国土交通省岡山国道工事事務所北側の地では北半（土層坑12）が河道、南半（土層坑11・13）が微高地であると確認している。その微高地は土層坑11側の方が安定しており、恐らく、古松園（土層坑14）を経て、県立岡山病院敷地まで広がっているようだ。ただ土層坑14に代表されるように、西方になるにつれ、微高地基盤土は砂質が強くなり、弥生土器が認められないなど、岡山大学医学部構内のように安定した基盤土を形成している印象はない。このことは、県立岡山病院敷地<sup>(12)</sup>の西半は河道であること、微高地基盤土がやや軟弱気味であることなどから、微高地端部の状況を示しているかあるいはその形成が新しいと判断できる。北側に隣接する敷地<sup>(13)</sup>でも同様のこととを確認している。

すなわち、鹿田遺跡の微高地は、北東から南西方向に形成された微高地であり、岡山大学医学部構内を核にして南西側に拡大していったものと思われる。西南端は都市計画道路付近までは広がっている。

鹿田微高地でも、天瀬・新道微高地で想定されたように、下流域に徐々に微高地が形成されていく、それにつれ居住域が拡大していった傾向が認められるのである。

## III. 大供本町微高地

鹿田小学校を中心にしてまた別の微高地が形成されている。ただ他の微高地ほど面的な調査が実施されていないため、実情はあまり明らかでない。近年、大供地区区画整理事業による発掘調査<sup>(14)</sup>が実施され、微高地内の縦断方向の様子が捉えられるようになった。その発掘調査域の北半は微高地、南半は湿地状況であると確認されている。弥生土器が散見されるようだが、古代・中世に遺跡形成の盛期がある。

微高地は、北側を流れる今一大野用水までは広がらず、南は旧庭瀬往来まで下らない。また東端は、県道大元停車場線の道路に沿って何カ所かの試掘ないし立会の成果（土層坑8・9）が得られている

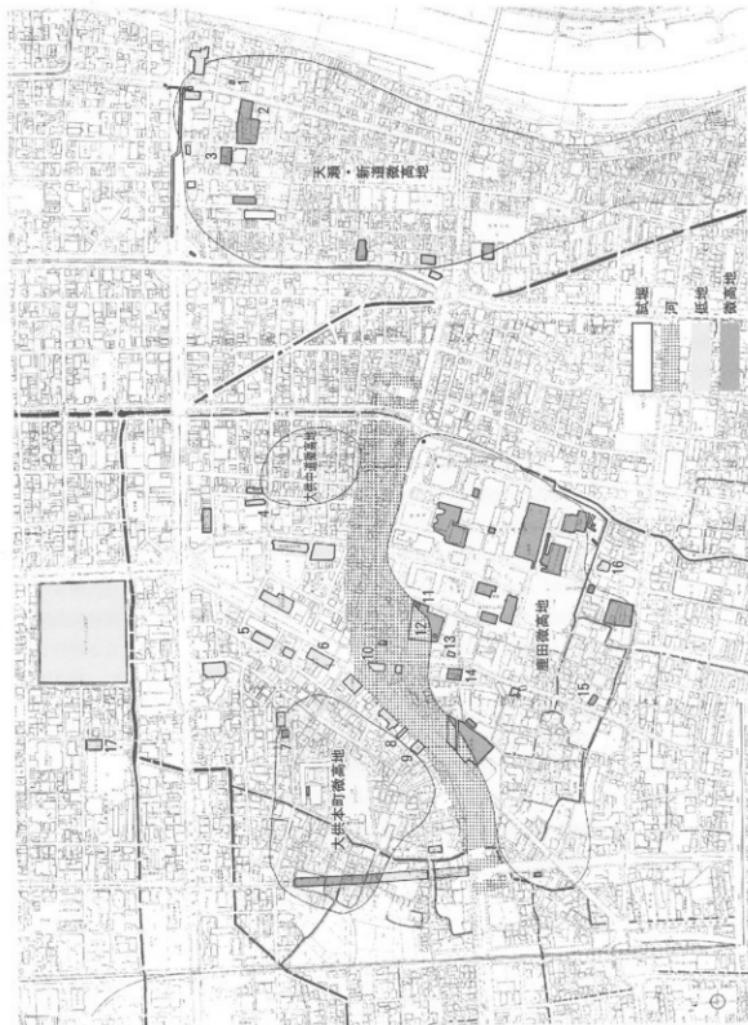


図18 熊田遺跡周辺の地形復元

卷之三

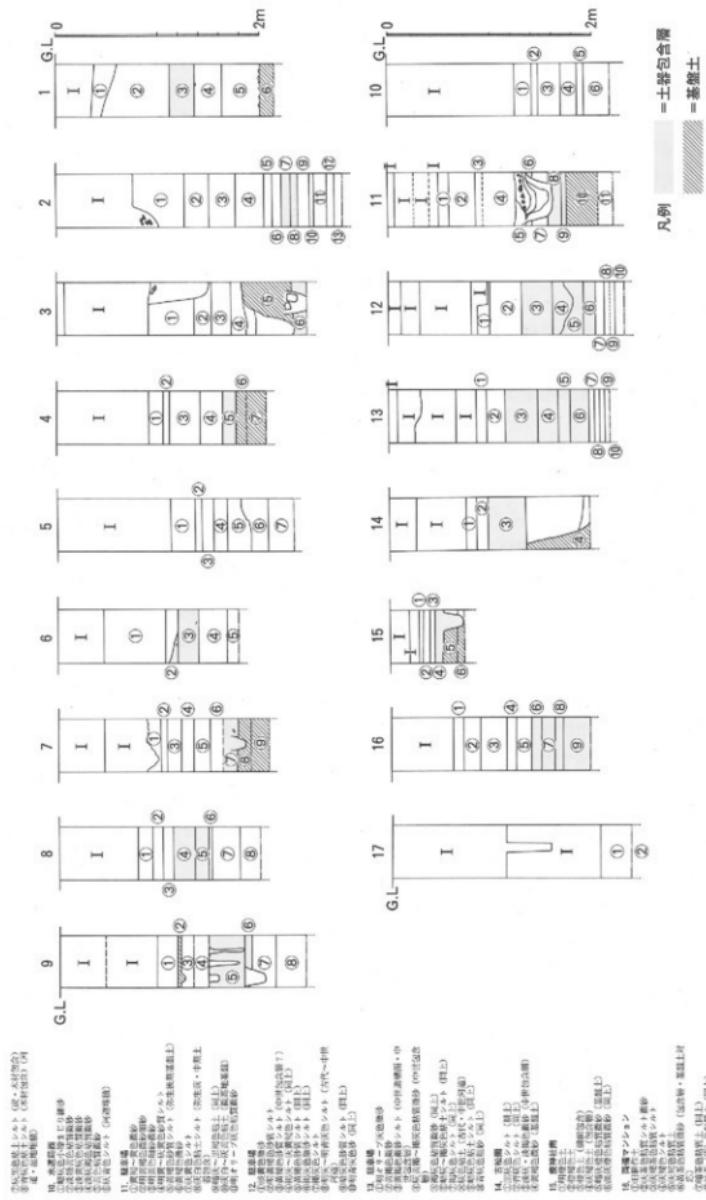


図19 虎田遺跡周辺の土層模式図（1/40）

が、一様に下層では湿地ないし河道堆積を示すものの、上層では微高地からの流れ込みによる中世土器を包蔵する層が形成されていて、少なくとも付近に微高地が広がる可能性を示している。この辺りは庭瀬往来筋にあたり、近世に宅地として整備された場所である。その土地造成の際に近隣の包蔵土層、恐らく往来筋よりは西側を整地した結果、削平された包蔵土が堆積した可能性がある。どちらにせよ、大供本町微高地の東端周辺の様相と判断して良いだろう。

北東端は、岡山営林署宿舎での試掘（土層坑7）から、遺跡（大供東浦遺跡）の所在を確認した。ところが隣接する労働基準監督署新宮に伴う立会では、微高地端部の状況と確認されている<sup>(10)</sup>。この状況は、淳風会ビル西側（土層坑5）<sup>(10)</sup>やJAビル北側（土層坑6）の観察とも整合する。この土層坑5・6は先の土層坑8・9と同様であり、土器包蔵土の流入・整地が見られるが、基盤土は確認されない。主要地方道岡山児島線沿線は、土層坑17に代表され、湿地状況である。微高地はこの沿線までは広がっていないと思われる。

南端も、岡山市民信用金庫西側はすでに湿地状況を示しているから、この地まで微高地は広がらない。

以上のことと総合すると、大供本町微高地の範囲は、図18のように想定されよう。

#### IV. 大供中道微高地

今まで述べてきた微高地以外に、岡山貯金局周辺でも小規模ながら、微高地の形成が想定される。大供中道遺跡として報告<sup>(11)</sup>した遺跡はこの一画にあたり、水田跡が確認されたものの、集落域を示すような遺構は検出されていない。微高地の中心部では無かったと想定される。また、岡山貯金局の敷地（土層坑4）でも土器細片を含む包蔵土の流入は認められるものの、微高地中心域の様相ではなかった。岡山市役所本庁舎、鹿田駅車場および北側の分庁舎は水田ないし湿地であることを確認しているので、微高地の広がる余地は東と南側に限定される。このまま南に拡大すれば、鹿田微高地と連結し、同一の微高地となる可能性もある。しかし、鹿田微高地と大供中道微高地の間には、先に述べたように河道に起因する粗砂層が介在するため、別の微高地と捉えておきたい。この微高地の広がりは、現春日町域ほどの範囲であろうか。

なお、鹿田微高地とこの微高地を分断する河道は、水道局及びその西側（土層坑10）においても確認されており、河幅約100mほどと復元できる流れが、県立岡山病院の西脇を流下している。

旭西平野南半部における微高地の分布と形成の状況は、要約すると、図18のように復元できることになる。

#### 2. 旭西平野南半部における遺跡の動向（素描）

旭西平野南半部の微高地上に形成された遺跡の様相を、ここで概観しておきたい。

もちろん遺跡出現にあらわされる土地の開発は、鹿田周辺だけで完結する事項ではなく、広い視野にたった展望が必要とされる。旭川西岸平野においては、土井基司氏が遺跡の立地と土地利用について述べて<sup>(12)</sup>いるし、また、松木武彦氏が岡山平野における鹿田集落の位置づけについて見通している<sup>(13)</sup>。ここではその成果に導かれつつ、南半部を中心とした開発に限定して遺跡の動向を素描しておきたい。

さて、旭西平野南半部における初期の足跡は、鹿田微高地の縄文中期土器の出土<sup>(14)</sup>で確認される。この土器片は、縄文土器が集中的に出土する津島岡大遺跡縁辺など上流からの流入物とすることもで

きるが、散発的ながら沖積微高地上を生業活動の対象域としていた微証と捉えることも可能である。

北半部山麓の朝寝鼻遺跡では、すでに羽島下層式土器群が出土<sup>(30)</sup>し、また津島江道遺跡からも縄文前期土器<sup>(31)</sup>が出土している。その縄文前期土器検出面は標高2.5mほどの水準であるが、おそらく縄文前期前半には、旭西平野は沖積化が進行している最中で、その微高地上ではたとえ恒常的な居住環境なくとも、生活の活動対象域として認識はされていたと思われる。鹿田遺跡の縄文中期土器も、沖積地に進出し活動していた縄文人の生活痕跡の一資料であると考えたい。同じく、鹿田微高地で縄文後・晚期～弥生前期の土器が出土することも、生業活動の一環としてある程度の定着が達成されていた結果と理解したい。その生業活動の実態は不明とせざるを得ないが、獵や魚介類の採集を求める流動的な活動であったと思われる。南半部微高地に対する継続的かつ積極的な活動実態があったからこそ、弥生中期以降遺跡の形成が促進されていったのであり、弥生後期段階では製塩・漁業・海上交通への従事、そして他地域との交易の仲介などと海を意識した生活基盤の生成が醸成されていったのであろう<sup>(32)</sup>。

ただ、弥生中期のころ、周辺はまだ海水の影響を受け水田域は限定されていたらしく、水田跡は今のところ確認されていない。後期になると、天瀬・新道微高地の北縁域で水田耕作が行われるようになり、また鹿田微高地南邊でも水田跡が検出<sup>(33)</sup>されるなど、農業の占める割合が増加してきている。海岸線は沖積作用により徐々に後退し、海水の影響も減じ、水田域あるいは可耕地の拡大が可能となつていったと思われる。このころになると、経済的基盤を津島岡大遺跡周辺に依拠していたと想定<sup>(34)</sup>される状況からも脱して、南半部微高地集落の自立が促されていき、一定の勢力を維持する下地が形成されたと見なすことができる。古墳時代には、この傾向がさらに顕著に進展していき、旭西平野北半部の勢力に埋没することなく、網浜茶臼山古墳・渋茶臼山古墳を築くような勢力が確立していたと想定<sup>(35)</sup>されるまでになった。

ところが古代になると、旭東平野に備前国府が設置され、政治的にも経済的にもまた土木事業なども中央政権の影響をもろに受けるようになり、旭西平野南半部に成長してきた在地勢力は、中央政権の支配下に従属し埋没してしまうのか、あるいはその支配機構のなかで一定の勢力を確保し個性を維持するためにはどうすべきか、日々逡巡したことであろう。

そのような情勢のもとで、岡山平野特に旭西平野における開発を概観しようとすれば、条里制に触れるを得ない。岡山平野における条里に関しては、すでに複数の研究成果<sup>(36)</sup>があがっている。ここでは鹿田微高地に係わる事項に絞り言及する。

さて、旭西平野では、条里制に由来すると思われる正方位区画が確認されており、古文書や地名等からその条里の復元が試みられてきている。発掘調査においても、復元条里と整合する溝・鞋畔等が検出されている。津島岡大遺跡での成果<sup>(37)</sup>によれば、里境と重複する大溝は、少なくとも10世紀後半には一部埋没状態にあるようなので、条里施行はそれより遅る時期と想定できる。その条里の南限は、土層坑17の南側を東西方向に流れる野田用水あたりと推定されている。

御野郡に見られる牧石・御野・津島・伊福・広世・出石郷などは、平野北半部における郷で、条里施行域以南には郷の所在が知られていない。条里施行時に掌握されていた集落の形成実態を反映していると判断され、その意味では鹿田地域は新規開発域と認識されていたのである。ところが、鹿田

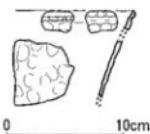


図20 津島江道遺跡出土  
縄文前期土器 (1/4)

地域でも、平野北半とそれほど変わることがない時期に、すでに集落が所在していた可能性があることが判ってきた。それは鹿田遺跡にとどまらず、その周辺の調査でもほぼ同時期の遺跡が確認されつつあることからも言えることである。そうなると単純に北半の開発が古くて、鹿田地区が新しいとは言えなくなってきた。

当遺跡が位置すると思われる鹿田庄も、817（弘仁8）年にはすでに藤原氏の殿下渡領になっており、奈良時代後半頃には、郡域の南端の旭川河口周辺に開発をみていたと推測される。遺構、遺物としても、鹿田遺跡においては奈良時代から平安時代初頭の井戸、溝、土坑などの多くの遺構と多数の遺物が検出されており、また新道遺跡においては平安時代末期の井戸から「・・・御庄久延弁」の文字を持つ木簡が出土し、新道遺跡が鹿田庄域に含まれる可能性を示唆しているのである。

平安時代に至ると、荘域縁辺部においてその經營を拡大させたと思われ、平安時代後期には鹿田庄をはじめとして、大安寺荘、野田保などの荘園が、公領域である出石郷や伊福郷などを取り囲むかたちで存在する状況を呈する。

一方鹿田庄域に属する鹿田・大供本町微高地では、磁北から約15度東に振れて方格地割りが確認され、旭西平野北半部とは条里の軸が異なることが古くから指摘されていた。この地割りは条里制に擬して設定されているもので「亜条里」と理解され、旧地形の復元結果や用水系統などから、その成立は中世に下ると判断されている<sup>(20)</sup>。すなわち、国衙主導による条里施行は、旭西平野南半部にまで及ぶ状況ではなかったと認識されていたのである。

ところが最近の調査例によると、大供本町微高地では9世紀ないし10世紀に「亜条里」方向と一致する溝が掘削されていたらしいことが確認<sup>(21)</sup>されることとなった。この溝が方格地割に伴い掘削された溝とすれば、この「亜条里」もまた中世に降りると考える必要はなく、北半部における条里の設定時期と大きな隔たりがあるとは言えない。かつては開発年代の差が、地割り方位の差に反映されていたと説明する傾向にあったが、一概にそう言えなくなってきたのであり、鹿田遺跡における古代の遺構出現時には「亜条里」も成立していた可能性がある。

しかし、鹿田・大供本町微高地周辺を流れる用水は、微高地の形成に、すなわち微妙な起伏形状に影響されて流下しているようにみえ、溝と道の形状が方格地割りを貫徹しているようには思えない。少ない労働投下によりながらも方格地割りを実現するため、正方位地割りではなく、鹿田・大供本町微高地の形成方向に軸線を設定し、開発努力を行っていった結果が、「亜条里」景観を現出させることとなったと考える。恐らく古代前半における南半部の開発は、新道遺跡・岡大医学部構内・大供本町遺跡の各微高地を連なる範囲までであって、その範囲内にあっても面的な開発はいまだ途上にあった。微高地間の湿地の干渉化が進み、微高地縁辺に用水が掘削され、水田開発が可能な条件下となつた段階で、その周辺が水田化されていったのである。鹿田庄域が南半域に広がりを見せる様相は、周辺部の拡張につれて荘域を拡大していく姿を反映しているのであろう。

とするならば平野北半とは開発の契機が異なり、北半部の条里制と「亜条里」とを同一に捉えることはできない。開発原理が異なるということは、その主体が国衙権力ではなく、有力な在地勢力の開発であった可能性を想定することになる。だからこそ、その後殿下渡領となって藤原氏の管理下におかれれる荘園へと繋がっていたのであろうし、藤原氏を後ろ盾とすることにより在地側には、周辺の開発や利権の確保など優位性が担保されたものと思われる。

現状では古代の御野郡の行政的中心は平野北半である。古代の御野郡の一部は、奈良時代後半頃か

ら在地勢力ではなく、中央の有力寺院、貴族による開発が、郡域の南西側の干潟地帯においてすすめられていたと考えられる地域である。その開発の様相は、国衙城周辺で行われた長江葦原あるいは、14世紀前半には葦原を開拓して三野新庄を興したとされる前田右エ門尉菅原重範なる人物の開発の姿として例示されよう。

旭西平野南半部の特徴は、開墾による耕地拡大に止まらず、海と河川の交差点であるその立地性から、北半部およびその周辺のムラに物資を運ぶ、あるいは集積する中継地としての機能が重視されていた場所<sup>(3)</sup>でもあった。そして鹿田・大供本町微高地には、その機能に関連する施設が設置されていたのであろう。岡山県下における縄軸出土遺跡は、概観したところ図21・表6のとおりであるが、傾向として国府域周辺、官道沿いそして河口及び沿岸部に集中している。特に足守川一川入遺跡周辺、旭川一鹿田遺跡周辺、吉井川一門田遺跡周辺の状況は、海と河川を意識した集落の所在を示している。その一つの地域にある鹿田遺跡、県

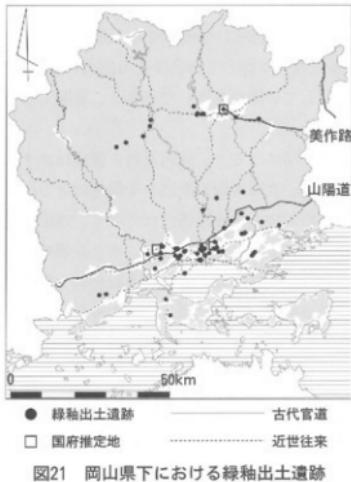


図21 岡山県下における縄軸出土遺跡

| 遺跡        | 所在地     | 参考文献  | 遺跡     | 所在地       | 参考文献                         |
|-----------|---------|---|--------|-----------|------------------------------|
| 吉井川谷筋遺跡   | 美山市     | 県埋文報告 (40) 1981                                     | 大井東西古道 | 岡山市瀬戸町    | 県埋文報告 (59) 1965              |
| 吉井川扇筋遺跡   | 美山市     | 県埋文報告 (40) 1981                                     | 御野通路   | 岡山市瀬戸町近江  | 岡山埋蔵資料 (1) 1985              |
| 吉井川扇筋島根通  | 美山市     | 県埋文報告 (50) 1985                                     | 御野の内通路 | 岡山市瀬戸町久居寺 | 道傍地圖第9分冊                     |
| 伊佐野河内通路   | 美山市     | 県埋文報告 (40) 1980                                     | 島ノ内通路  | 岡山市瀬戸町久居寺 | 道傍地圖第9分冊                     |
| 西山城二ノ丸跡   | 美山市     | 県埋文報告 (17) 2020                                     | 白幡寺跡   | 倉敷市光明     | 日曜寺寺地 (205) 植物生態文化財センター      |
| 桂井通路      | 美山市     | 県埋文報告 (1) 1972                                      | 吉井通路   | 倉敷市光明     | 県埋文報告 (20) 1980              |
| 上土原(立花)遺跡 | 美山市     | 県埋文報告 第4分冊  | 天王通路   | 倉敷市光明     | 県埋文報告 (5) 1958               |
| 加茂通路      | 美山市     | 県埋文報告 (38) 1980                                     | 門田通路   | 倉敷市近久町    | 柳原文報告 (50) 1985              |
| 北方下通路     | 美山市     | 県埋文報告 (20) 1980                                     | 猪山通路   | 倉敷市近久町    | 県埋文報告 (50) 1987              |
| 北方植田通路    | 美山市     | 県埋文報告 (20) 1980                                     | 第三種通路  | 倉敷市近久町    | 近久町史、考古編 2006                |
| 北方中通路     | 美山市     | 県埋文報告 (20) 1980                                     | 第四种通路  | 倉敷市近久町    | 近久町史、考古編 2006                |
| 北方内通路     | 美山市     | 県埋文報告 (44)  | 第五種通路  | 倉敷市近久町    | 県埋文報告 (18) 2005              |
| 西山通路      | 美山市     | 県埋文報告 (38)  | 御賀手通路  | 御賀市吉原町    | 県埋文報告 (37) 1984              |
| 吉井高尾跡     | 美山市     | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター<br>吉井高尾                           | 御賀手通路  | 御賀市吉原町    | 県埋文報告 (37) 1984              |
| 林田古田通路    | 美山市     | 岡山県立埋蔵文化財調査研究センター<br>吉井高尾                           | 上土原通路  | 倉松市二輪     | 昭社埋蔵文化財調査年報7 1997            |
| 津方通路      | 美山市     | 県埋文報告 (17) 2000                                     | 御戸通路   | 倉松市二輪     | 昭社埋蔵文化財調査年報7 1997            |
| 西方高尾通路    | 美山市     | 県埋文報告 第5分冊  | 御戸通路   | 美山町       | 県埋文報告 (3) 1974               |
| 坂戸高尾通路    | 美山市赤井   | 県埋文報告 第5分冊  | 和束通路   | 瀬戸市端町     | 県埋文報告 (42) 1961              |
| 坂戸寺跡      | 美山市赤井   | 県埋文報告 第5分冊  | 奥の内通路  | 瀬戸市       | 岡作内通路と御蔵屋敷 (1) 1984 岡山市教育委員会 |
| 高森寺跡      | 美山市高森寺上 | 県埋文報告 第5分冊  | 御野通路   | 津山市       | 県埋文報告 (8) 1975               |
| 八戸通路      | 美山市高森寺  | ハガ直通 (304) 岡山市教育委員会                                 | 久米庵通路  | 津山市久米     | 県埋文報告 (10) 1978              |
| 津井大通路     | 美山市高森寺  | 津井大通路 (1) 1968                                      | 高森通路   | 津山市久米     | 県埋文報告 (2) 1974               |
| 津井大通路     | 美山市高森寺  | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター                                   | 津井通路   | 津山市久米     | 県埋文報告 (2) 1974               |
| 津井通路      | 美山市高森寺  | 県埋文報告 (30) 1994                                     | 御野通路   | 津山市久米川浦   | 津山市久米川浦                      |
| 中篠通路      | 岡山市中篠町  | 県埋文報告 (12) 2004                                     | 下市通路   | 高森町合志     | 県埋文報告 (3) 1973               |
| 川入通路      | 岡山市中篠町  | 川入・中篠古道 (2006) 岡山市教育委員会                             | 高森通路   | 高森町合志合郷町  | 県埋文報告 (11) 1976              |
| 高ノ瀬通路     | 岡山市中篠町  | 県埋文報告 (12) 2004                                     | 高森古通路  | 高森古見      | 県埋文報告 (5) 1981               |
| 仏生瀬通路     | 岡山市高瀬町  | 県埋文報告 (18) 2004                                     | 御中平通路  | 高森市北之郷五郎  | 県埋文報告 (12) 1976              |
| 更良通路      | 岡山市高瀬町  |   | 高瀬通路   | 高森市北之郷五郎  | 県埋文報告 (12) 1976              |
| 寺原通路      | 岡山市高瀬町  | 寺原通路 (1990) 同上 (吉井瀬津町教育委員会<br>吉井瀬津町埋蔵文化財調査報告書) 1989 | 平瀬町    | 高森町       | 県埋文報告 (8) 1975               |
| 高瀬通路      | 岡山市高瀬町  | 吉井瀬津町教育委員会<br>吉井瀬津町埋蔵文化財調査報告書) 1989                 | 寺町     | 高森町       | 県埋文報告 (8) 1975               |

参考文献凡例：県埋文報告＝岡山県埋蔵文化財調査報告 岡山県教育委員会  
遺跡地図＝訂正岡山県埋蔵文化財調査報告 国山県教育委員会

表6 岡山県下における縄軸出土遺跡

立岡山病院それに大供本町遺跡から9～10世紀の綠釉陶器が出土する事象は、有力者の屋敷・饗應施設・寺院など一般と異質な建物の所在を示す一指標として有効であるとすれば、そのような建物に並立して、物資の保管・管理を執務する関連施設が、各微高地に所在していたと考えることも可能であろう。9・10世紀、各微高地には流通関連施設が整備され、事務が執行されていたのかもしれない。「吉備穴海」に面して綠釉陶器を出土する遺跡は、おおかた内陸との交通にも至便な位置にあり、中継地としての機能を担って成立し、展開したものと考えられる。

古代後半になると、鹿田遺跡の規模はますます拡大していく、微高地間の湿地の干渉化はさらに進み、それにつれて物資集積機能だけでなく、水田の管理機能が強化されていった。同時に、水上交通の利点を生かした物資集積施設は、周辺の干渉化に伴い機能が衰退化していく、最終的には、旭川あるいは内海に面した立地場所へと推移していく。鹿田周辺の微高地は、12～13世紀を待たずして、あるいは11世紀にはすでに水運施設としての機能は失われていたであろう<sup>(30)</sup>し、そのころには旭川沿岸の適地に移動し統合されていった<sup>(31)</sup>ものと思われる。

図22は旭西平野南半部における荘園の分布と初見年代<sup>(32)</sup>を表示している。荒野あるいは公領段階からすると、干渉化の様相は、表示されている年代より、はるかに遡ることとなる。

大宮家文書『備前国上郡道郡荒野莊領地図』(1300(正安2)年)に描かれている旭川河口付近における市の脈わいの様子は、物資集積場所がこのころすでに旭川沿岸に移っていたと想定できる。またこの様相は、吉井川における西大寺・高梁川における西阿知のように、河川及び海上交通を前提に発達してきた市と集落の状況<sup>(33)</sup>がここ旭川においても想定できることを示唆している。ところで、1445(文安2)年の『兵庫北関入船納帳』<sup>(34)</sup>には兵庫北関に入港した船の所属港が記載されているが、関連する地域では牛窓・犬島・番田・阿津・郡・八浜・連島などの港は確認できるが、西大寺・旭川に位置する港は確認できない。ただ、西大寺では犬島・阿津が、旭川では郡がその河口付近に位置しており、河口の沖積化にしたがい、瀬戸内海航路の主要港としての役割を果たしていた可能性はある。これら港を経由して河口を週る交通路が機能していたのであろう。

確かに旭西平野において、鉄道が敷設されるまでは、京橋周辺の脈わいに代表されるように大量輸送の主役は舟運であったし、鹿田遺跡の評価と意義も、内陸部からの物資を背景に発達した交通の要衝を一つの要因として上げることは許されよう。しかし、川の堆積作用などの影響から大型船の通航は困難になり、より河口近くに制限されていったであろう。それにつれ、鹿田周辺は他の水田地帯と同列に位置づけられ農村地帯として埋没していったものと思われる。

このように、鹿田周辺の歴史的変遷を素描し、当報告のまとめとする。

## 註

(1) 草原孝典2002「中世遺構面 周辺の地形と遺跡の分布」『新道遺跡』岡山市教育委員会

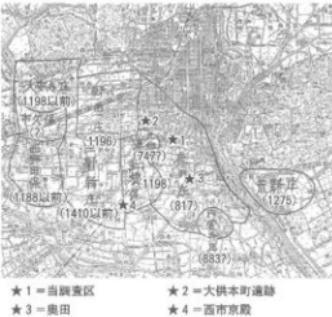


図22 旭西平野南半部の荘園分布  
(註30文献から引用、一部改変)

- (2) 出宮徳尚1986「50天瀬遺跡」『岡山県史第18巻（考古資料）』岡山県
- (3) 杉山一雄編2001『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154 国土交通省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会
- (4) 安川満2001「天瀬（共同溝）遺跡の立会調査」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999年度』岡山市教育委員会
- (5) 註3前掲書
- (6) 註2前掲書 また出宮氏から「天瀬ポンプ場建設に伴う掘削時にかなり深い地点から、弥生中期前葉の壺が出土した」と教示をうけた。
- (7) 出宮徳尚1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報35』
- (8) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1988・1990・1993・1997「鹿田遺跡I～4」（岡山大学構内遺跡発掘調査報告3・4・6・11）の各報告書。近年の成果については『岡山大学構内遺跡調査研究年報』および『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001～2004』等を参照。
- (9) 宇垣匡雅1989「鹿田遺跡確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告19』岡山県教育委員会  
金田善敬2000「県立病院建て替えに伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告30』岡山県教育委員会  
渡邊恵里子2002「県立岡山病院建替に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告32』岡山県教育委員会  
澤山孝之2003「県立岡山病院建替に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告33』岡山県教育委員会
- (10) 神谷正義2003「鹿田本町遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報2』岡山市教育委員会
- (11) 岡山市教育委員会2006「大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料」
- (12) 河田健司2002「岡山労働基準監督署庁舎新宮に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告32』岡山県教育委員会
- (13) 岩崎志保2006「鹿田遺跡周辺の調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (14) 河田健司2000「大供中道遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会
- (15) 土井基司1995「津島岡大遺跡の地形変遷と立地について」『津島岡大遺跡6』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (16) 松木武彦1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3－第5次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (17) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1988「鹿田遺跡I」 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 302頁
- (18) 富岡直人ほか1998「岡山市津島東3丁目朝寝鼻貝塚発掘調査概報」「加計学園埋蔵文化財発掘調査報告書2」
- (19) 神谷正義・草原孝典1998「岡北中学校内遺跡の発掘調査」『岡北中学校五十年の歩み』岡北中学校創立50周年記念事業実行委員会 図20は前掲書442頁図15を改変。
- (20) 註2前掲書 出宮徳尚「50天瀬遺跡」・山本悦世「51鹿田遺跡」
- (21) 喜田敏・岩崎志保2000「鹿田地区 鹿田遺跡第9次調査・第11次調査」岡山大学構内遺跡調査研究年報17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (22) 註14前掲書
- (23) 註15前掲書

- (24) 岩崎志保2005「条里の講について」『津島岡大遺跡16－第17・22次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターに津島岡大遺跡の成果と周辺の遺跡及び先行する研究についてまとめている。
- (25) 石田寛1962「第四編第二章 岡山市街地およびその周辺の条里」『岡山市史（古代編）』岡山市役所  
植松岩實2005「岡山平野の条里地割」『瀬戸内地理』第14巻など
- (26) 註11前掲書
- (27) 三好基之1990「瀬戸内海海運の発達と市町の賑わい」『図説岡山県の歴史』河出書房新社  
註1 前掲書 80頁  
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2005『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報No34－鹿田遺跡と「鹿田庄」』
- (28) 註1 前掲書  
鎌木義昌1962「第一編第五章五岡山市内の弥生遺跡」『岡山市史（古代編）』岡山市役所 「その他の弥生遺跡」地名表に、大供掘中・鹿田・天瀬、さらに南に位置する奥田・福浜浜野・新保・西市を弥生包含層と紹介している。この地名表の時期の認定にはやや疑問が残るが、奥田から龜山焼臺（山陽学園保管・西川宏氏教示）、西市京殿から13世紀代の土師質土器碗や輸入陶磁器が出土している。
- (29) 註1前掲書 82頁
- (30) 藤井駿1966「第一編第一章一岡山周辺の諸莊園」『岡山市史（産業経済編）』岡山市役所 引用図は巻頭図版から、各莊園初見年代本文の記述を参照。
- (31) 三宅克広1933「中世瀬戸内の水運と備前国児島周辺」『倉敷の歴史』第3号 倉敷市史紀要  
三宅克広1999「水運の展開と河口都市・港町の繁栄」『新修倉敷市史二（古代・中世）』倉敷市
- (32) 林屋辰三郎編1981『兵庫北関入船納帳 燈心文庫』中央公論美術出版

# 図 版

# 図 版 1

発掘調査区全景  
(背景は岡大医学部)



調 査 区 全 景  
(西から)



調 査 風 景



図版 2



調査区全景  
(東から)



柱列(南から)



各Pit(南から)



# 図版 3

土坑 1



土坑 2

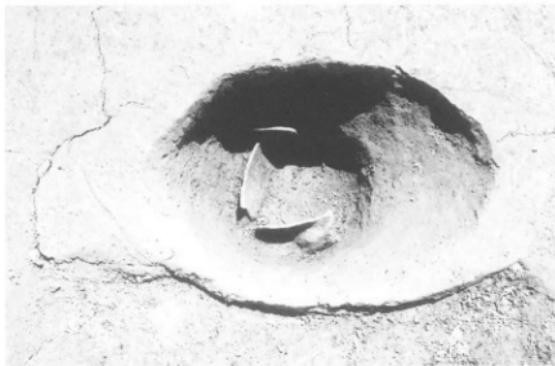


土坑 2 断面  
(北から)



図版 4

Pit 6



柱列 1 断面

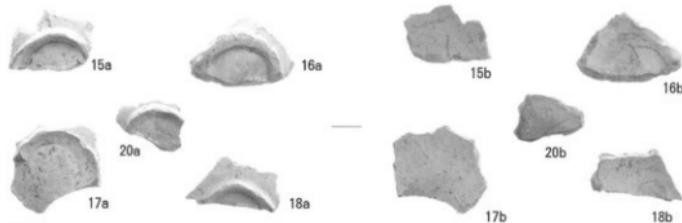


井戸

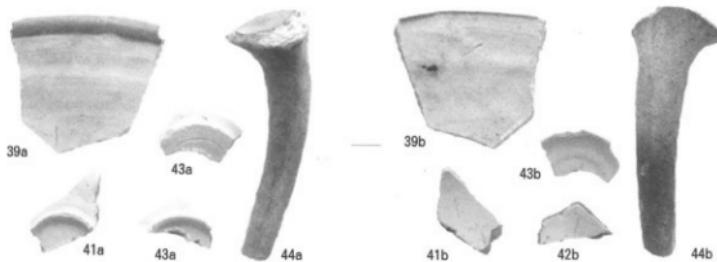


# 図版 5

出土物（中世土器類）



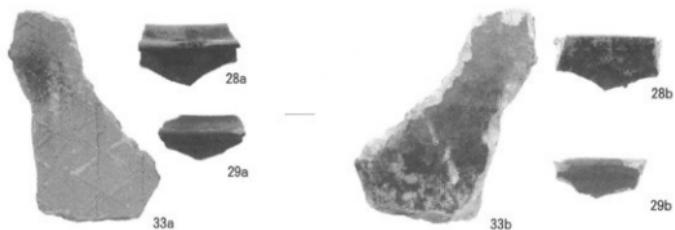
井戸



井戸下層

# 図版 6

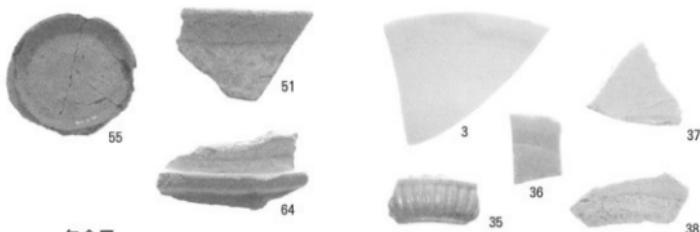
出土物（陶磁器類）



井戸下層

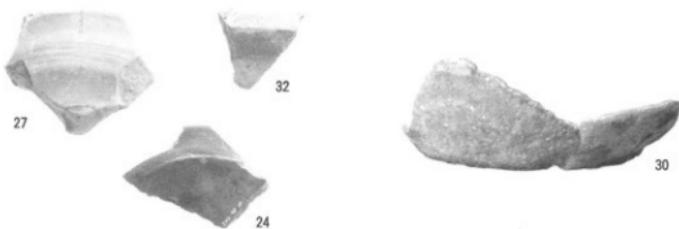


包含層



包含層

3 = 土坑 1、24~38 = 井戸



# 図版 7

出土物（木製品・獸骨）



50a



49a



49b



50b

井戸下層



48



47a



47b



両生類の骨

井戸下層

印刷仕様

|        |             |                                 |               |
|--------|-------------|---------------------------------|---------------|
| 紙質     | 表紙          | アートポスト                          | 200kg         |
|        | 本文          | 雷鳥上質                            | 90kg          |
|        | 写真図版        | サテン金薄                           | 135kg         |
| D T P  | O S         | WindowsXP Professional          |               |
|        | D T P       | PROX ELWIN                      |               |
|        | 図版作成        | Adobe Illustrator 10            |               |
|        | 写真調整        | Adobe Photoshop 6               |               |
|        | Scanning    | EPSON ES 8000                   |               |
|        |             | 図面類                             | EPSON ES 8000 |
| 使用Font | モトヤ         | OpenType 基本2書体(モトヤ明朝2、モトヤゴシック3) |               |
| 画像原稿   | 階調画像線数は175線 |                                 |               |

報告書抄録

|                |  |       |          |                                  |                   |                  |   |
|----------------|--|-------|----------|----------------------------------|-------------------|------------------|---|
| ふりがな           | しかたいせき   |       |          |                                  |                   |                  |   |
| 書名             | 鹿田遺跡   |       |          |                                  |                   |                  |   |
| 副名             | ドコモ中国東古松ビル新築工事に伴う発掘調査                          |       |          |                                  |                   |                  |   |
| 編著者            | 神谷正義・柴田英樹                                      |       |          |                                  |                   |                  |   |
| 編集・<br>発行機関    | 岡山市教育委員会文化財課<br>岡山市埋蔵文化財センター                   |       |          |                                  |                   |                  |   |
| 所在地            | 〒700-8544 岡山市大供一丁目1番1号<br>〒703-8284 岡山市緑浜834-1 |       |          |                                  |                   |                  |   |
| 発行年月日          | 2007年3月31日                                     |       |          |                                  |                   |                  |   |
| ふりがな           | ふりがな   | コード   | 北緯       | 東経                               | 調査期間              | 調査面積             | 調査原因  |
| 所収遺跡           | 所在地  | 市町村   | 遺跡番号     | ° ′ ″                            | ° ′ ″             | m <sup>2</sup>   |   |
| しかたいせき<br>鹿田遺跡 | 岡山県<br>岡山市<br>東古松<br>一丁目20番1                   | 33201 |          | 34度<br>38分<br>53秒                | 133度<br>55分<br>6秒 | 2002.7.8<br>7.19 | 86<br>ドコモ中国<br>東古松ビル<br>新築工事に<br>伴う事前調<br>査 |
| 所収遺跡名          | 種別   | 主な時代  | 主な遺構     | 主な遺物                             | 特記事項              |                  |   |
| 鹿田遺跡           | 集落   | 中世    | 土坑・桂穴・井戸 | 土師器・須恵器<br>綠釉・早島式土器<br>輸入陶磁器・井戸側 |                   |                  |   |

---

## 鹿田遺跡 - ドコモ中国東古松ビル新築工事に伴う発掘調査 -

発行 平成19年3月31日

編集 岡山市教育委員会文化財課  
岡山市埋蔵文化財センター

発行 岡山市教育委員会  
〒700-8544 岡山市大供一丁目1番1号

印刷 片山印刷株式会社

---